日蓮正宗

# 教学小辞典

創価学会教学部編

創 価 学 会

顕益・冥益……三〇九
不自惜身命……三一一
有徳王と覚徳比丘……三一四
異体同心……三一五
如説修行……三一七
自行化他……三一八
聞法下種と発心下種……三一九
以信代慧……三二一
随方毘尼……三二二
善知識・悪知識……三二三
世法と仏法……三二四
勇猛精進……三二五
諸天の加護……三二六
魔の通力……三二七
供養……三二九
臨終の相……三三一
女人成仏……三三三
方便品・寿量品を読誦する意味……三三三

## 第六編　仏教史

釈尊の一生……三三六
付法蔵の二十四人……三三七
経典の結集……三四三
中国への仏教伝来……三四四
法華経の新訳・旧訳……三四五
日本への仏教伝来……三四六
日蓮大聖人のご一生……三四八
国家諫暁……三五〇
日興上人……三五二
六老僧……三五五
二箇相承……三五七
身延離山……三五八

原殿御書……三六〇
熱原法難……三六一
提婆達多……三六四
阿育大王……三六五
竜樹・天親……三六七
天台大師……三七〇
妙楽大師……三七三
伝教大師……三七四
日目上人……三七五
日有上人……三七七
日寛上人……三七七
六巻抄……三七八
四条金吾頼基……三八二
池上兄弟……三八四
南条時光……三八五
富木常忍……三八七
阿仏房……三九〇
日蓮宗一致派……三九一
本門法華宗（旧八品派）および仏立宗等……三九七
顕本法華宗……四〇一
法華宗……四〇三
旧本門宗……四〇五
立正佼成会……四〇七
孝道教団……四一三
砂村問答……四一四
霑志問答……四一六
小樽問答……四一七

## 第七編　古今の思想哲学の説明と批判

九十五派のバラモン……四二〇
儒教……四三

# 第六編　仏教史

## 【釈尊の一生】

インド生誕の釈尊は、いまをさる三千年前、当時インド一帯に勢力をはっていたバラモンの哲学を打ち破り、永遠の生命哲学を説き、八万法蔵といわれるおびただしい法門を残し、八十歳で寂滅涅槃したのである。

釈尊は迦毘羅衛城に、国王浄飯王を父とし、摩耶夫人を母として誕生した。幼名を悉達多といい、母の死後（太子出生後七日にして逝去したという）叔母の手に育てられた。

釈尊の幼名ゴータマ・シッダルタは釈迦牟尼世尊ともいわれるが、釈迦とは種族の名であり、牟尼とは聖者の意で、釈迦族出身の聖者を意味する。釈迦族は北インドのヒマラヤ山麓に小国をつくり、貴族的共和政治を行なっていたという。まず十人の長を選び、さらにその中から一人の国王を選んで政治を行なっていた。

長ずるにおよんで釈尊は、将来の国王になるための教育を、文武両面にわたってうけ、また耶輸陀羅女を妃として、一子・羅睺羅をもうけたこの羅睺羅はのち釈尊十大弟子の一人となり、密行第一といわれた人である。

釈尊は十九歳の時、王宮の生活を捨て、出離生死の道を求めて出家した。多くのバラモンを歴訪し、修行を積んだが、真の解説の道でないことを知り、自ら真の道を求めて難行苦行を重ねた。この苦行は十二年（七年との説もある）にわたったともいわれるが、これもまた真の法でないことを知り、苦行を捨てて、尼連禅河に入り、沐浴して牧女の捧げる乳を飲み、心身さわやかとなった。

ついで仏陀伽耶の菩提樹下の金剛宝座に座し、沈思黙想、よく魔を降して大悟を開いたのである。悟りを開

いた釈尊は、正覚を成じたその座で華厳経を説き、波羅奈国、鹿野苑へ行って憍陳如等の五人を済度した。

以後約五十年間、八十歳にして拘戸那城外の沙羅林中で寂滅するまで、法輪を転じ、不幸な民衆を化導した。王舎城においては、頻婆沙羅王をはじめ、宮廷の人々を教化し、故郷においては、父王はじめ親類の人々を化導したのである。釈尊の従弟・阿羅や、一子・羅睺羅も帰依し、舎衛城の富豪・須達長者は、有名な祇園精舎を供養した。もちろん釈尊に敵対する者も現われた。九横の大難と呼ばれるなかで、阿難の兄・提婆達多が憍慢の心を起こし、摩竭陀国の阿闍世太子と結託して、釈尊を迫害するという幾多の事件もあった。釈尊はこれらの大難を少しも恐れず説法を続け、華厳、阿含、方等、般若の経々を説き、最後に出世の本懐たる法華経を説いたのである。（五時・八教の項参照）

釈尊入滅の年代については数十種類の説があるが、東洋古来の説は、周の昭王二十四年（前一〇二九年）四月八日生誕、同穆王五十二年二月十五日、すなわち西紀前九四九年入滅と定め、「周書異記」にそれが出ている。天台、伝教もこれを基準とし、日蓮大聖人もお用いになっていたことは、開目抄によって明らかである。

## 【付法蔵の二十四人】

釈尊に順次嫡々付嘱され、正法時代に出現し、仏法を説いた二十四人の伝灯者である。付法蔵経（付法蔵伝・付法蔵因縁伝）六巻に説かれている。これら付法蔵の導師は正法時代の四依の菩薩として、おのおの、その時代相応の教法を弘めた死身弘法の行者である。法蔵とは仏説の結集されたものをいい、それを次々に付嘱した

ので付法蔵という。

摩訶迦葉・阿難・商那和修・優婆崛多・提多迦・弥遮迦・仏陀難提・仏駄密多・脇比丘・富那奢・馬鳴・毘羅・竜樹・迦那提婆・羅睺羅多・僧佉難提・僧伽耶奢・鳩摩羅駄・闍夜那・婆修盤陀・摩奴羅・鶴勒夜那・師子。これに阿難から旁出した摩田提を入れて二十四人といい（阿育大王経）、また二十五人とは釈迦仏を入れた場合をいう。摩訶迦葉が仏の滅後、付嘱を受け、付法蔵第五の提多迦まで各二十年、以上百年の間は但小乗教だけを弘通した。次の弥遮迦より付法蔵第十の富那奢等の四、五人は正法の先の五百年、解脱堅固の時代に小乗教を面として、ごくわずかの大乗教を弘通した。正法の後の五百年、禅定堅固の時代は付法蔵第十一の馬鳴より第二十三の師子まで十余人の人々であり、みなはじめは外道にはいり、次に小乗教をきわめ、後には諸大乗教を弘めて諸小乗教をさんざんに破した。（撰時抄二六〇ページ参照）

**摩訶迦葉**　迦葉尊者である。付法蔵の第一。釈尊十大弟子の一人で頭陀第一と称せられ頭陀修行に秀でていた。阿難と共に小乗の釈尊の脇士で、仏滅後二十年間、小乗教を弘通した。

**阿難**　阿難尊者。詳しくは阿難陀。付法蔵の第二。十大弟子の一人で常随給仕し多聞第一といわれ釈尊所説の経に通達していた。提婆達多の弟で釈尊の従弟。仏滅後、迦葉尊者の後を受け諸国を遊行して衆生を利益した。

**摩田提**　付法蔵の第三。阿難から法を受けて、師の滅後迦湿弥羅国に行って正法を弘めた。

**商那和修**　同じく付法蔵の第三。法を阿難から受けて摩突羅国・優留荼山に伽藍を建て、弘法に努めた。過去世に弊悪な商那衣を着た辟支仏を供養し、その聖徳に感じて「願くは、われ来世に聖師に値遇すること、

また是れに過ぎん、われ所有の諸の功徳聚、威儀法式および衣服、いま此の聖のごとくにして異なるなからしめん」と大誓願を起こしたので、母胎より一生商那衣を着たままであったという。ゆえにこの名がある。

**優婆崛多**　優婆毱多ともいう。付法蔵の第四。商那和修に師事して法蔵を付せられた。阿育王を化導し八万四千の塔を建てて供養せしめた。弘法が盛んであったので、仏滅後の第一人者と尊敬された。

**提多迦**　付法蔵の第五。優婆崛多を師として、行解おおいに努め阿羅漢果を得、三明六通を備えて教えを弘めたという。

**弥遮迦**　付法蔵の第六。正法の初めの五百年の間に世に出た中インドの人。初め八千の仙人の導師であって多聞博才で弁舌にすぐれていた。提多迦の教化で仏法に帰依し、その後、付法を受けて大いに仏法の宣揚に努めた。

**仏陀難提**　付法蔵の第七。北インドの迦摩羅国の人、弥遮迦の教化で出家し、たちまち声聞の四果を得たという。後、付法を受けて内心に大乗を奉じ外に小乗教をもって広く時の人々を導いた。

**仏駄密多**　または仏陀密多。付法蔵の第八。仏陀難提の弟子となり、智解がすぐれていたため付法を受け正法を弘めた。時の国王は大勢力があり勇猛博才であったが、外道を尊崇して仏法を破ろうとした。密多はその大本を倒そうとして赤旛を持って王城の前で十二年間往来し遂に王に召聞され、バラモン長者と宮殿で法論し大いにこれを破り帰依させた。王も邪心を改め正法に帰依し仏教を保護したという。密多もまた、内心には大乗教をもち、外には小乗教で衆生を化導した。

**脇比丘**　付法蔵の第九。迦弐志加王にもとめて仏典の第四回結集をさせた。

**富那奢**　付法蔵の第十。富那夜奢ともいう。インドの華氏国の人で仏滅後五百年ごろに生まれた。脇比丘から法を受け波羅奈国に行化して馬鳴尊者を化導した。

**馬鳴**　馬鳴菩薩。付法蔵の第十一。仏滅後六百年に出現した大乗論師である。智慧絶倫であったため、はじめは大憍慢を起こし衆生を軽賤していた。後に富那奢と論義し屈伏して弟子となった。馬鳴は深奥の法門を悟り法を付されてから、大いに邪見を破折した。はじめ華氏城に遊化し、兵乱の後、罽賓国王の保護のもと無量億人の人々に大いに施益し度脱させたという。過去世に白馬を鳴かせて仏法を守ったゆえに馬鳴の名があるという（曾谷殿御返事一〇六一ページ参照）。著書には「大乗起信論」一巻、「大宗地玄文本論」二十巻、「仏所行讃」五巻等がある。

**毘羅**　毘羅尊者。詳しくは迦毘摩羅という。付法蔵の第十二。摩竭陀国の人で、はじめ外道であり三千の弟子をもっていたとき、神通力を用いて馬鳴を陥れようとして、かえって論破されて弟子となった。馬鳴から滅後の付法を受け南インドさらに西インド一帯を化導し、法を竜樹に付した。著書には「無我論」一百偈があり、その外道を破折している様子は、金剛石が一切のものを破るようであるといわれているが、著書は伝わっていない。

**竜樹**　竜樹菩薩。竜猛ともいう。付法蔵の第十三。仏滅後七百年ごろ、南インドに出て大いに大乗教義を弘めた大論師である。（別項参照）

**迦那提婆**　提婆菩薩。付法蔵の第十四。南インドのバラモン族の出である。提婆は梵語で、天と訳す。迦那は片目の義。一眼であったからこのようにいわれた。一眼を天神にほどこしたともいわれ、また一女人に

与えて不浄を悟らせたともいわれる。竜樹菩薩のもとで出家し各国を遊化して広く衆生を救った。あるとき南インドの王が外道に帰依しているのを救おうとして、王の前であらゆる外道を破折した。ときに一外道の無知、凶悪な弟子が、師が屈伏したのを恥じて提婆に危害を加えた。しかるに命尽きる前に、かえってその加害者を救ったという。

**羅睺羅多**　羅睺尊者。羅睺または羅睺羅ともいう。付法蔵の第十五。インドの迦毘羅国の人で浄徳長者の子、生来聡明であった。提婆菩薩について出家し、大いに正法を弘めた。

**僧佉難提**　付法蔵の第十六。僧佉難提を訳して衆河という。室羅筏城の宝荘厳王の子で、法を羅睺羅多より受け、化導が終わってから法を僧伽耶奢に伝えた。

**僧伽耶奢**　訳して衆称という。付法蔵の第十七。摩竭陀国の人。仏法の正統を伝えて教化盛んであった。滅する前に法を鳩摩羅駄に伝えた。

**鳩摩羅駄**　訳して童受という。付法蔵の第十八。菩薩道を行じて智弁海のように広大であったので美名童子と称された。出家後、若くして、ことごとく解了し、頑愚な一国を化導したが、全部の人が信受しなかったので、自分の前を鉄馬万騎をよぎらせ一見しただけで間違いなく人名、馬色、衣服の姿を説明したので、人々は、ぜんぶ信伏したという。多くの書を著わして各国を遊化した。

**闍夜那**　付法蔵の第十九。鳩摩羅駄の弟子で、盛んに正法を弘通した。

**婆修盤陀**　付法蔵第二十。盤陀ともいう。博識で、智慧すぐれ、弁才に富んでいて、広く衆生を救った。

**摩奴羅**　付法蔵の第二十一。インドの那提国王の子で、南インドで正法を弘めた。

**鶴勒夜那**　または鶴勒夜奢。略して鶴勒。付法蔵の二十二。インドのバラモンの家に生まれた。出家し、摩奴羅に会って法を受け、中インドで仏法を弘めた。

**師子**　師子尊者または師子比丘といわれる。付法蔵の第二十三。最後の伝灯者である。釈尊滅後千二百年前後、中インドに生まれて鶴勒那夜から法を受けた。後に罽賓国に遊化して衆生を化導し仏法を大いに宣揚した。

この国の外道二人がこれを嫉んで、相謀って乱を起こし、仏弟子の姿をして王宮に潜入し、わざわいをなして逃げ去った。

檀弥羅王は誤解し、怒って師子尊者の頸を切ったが、血が出ずに白乳が湧くように出て、檀弥羅王の右臂が刀を持ったまま地に落ちて七日の後、命が終わったという。

## 【経典の結集】

仏教典の結集については、歴史上いろいろと異論はあるが、次のように行なわれたことが記録されている。

### 1　第一回結集

釈尊は生前、折にふれ機に応じて説法を行なったが、弟子たちはそれを記憶していただけで、筆記されることはなかった。滅後第一回の結集は、阿闍世王の外護の下に、摩竭陀国王舎城の南、畢波羅窟で、大迦葉が中心となって行なわれた。このとき千人の比丘が集まったと大論には述べられている（小乗の多くは五百人の長

老比丘という）。阿難は経蔵を、優波利は律蔵を、迦葉は論蔵を結集したという。この窟内結集に参加しなかった者は、畢波羅窟より西約六*の地で、経、律、論、雑集、梵咒の五蔵を結集したと伝えられる。すでに教団のなかには、保守的な長老たちに対して、教法や戒律の固定化を避け、釈尊の真の精神に生きようとした進歩的な流れがみられていた。

### 2　第二回結集

滅後百年ごろ、耶舎陀阿羅漢などの七百人が毘舎離において、三蔵の結集を行なったという。当時、跋闍子比丘は戒律に関する十の新説（十事）を主張したので、上座部の長老たちはこれに対し十事非法を決議した。ここに主として律蔵を中心として結集を行ない教団の統制を図ろうとした。

### 3　第三回結集

滅後二百年ごろ、阿育王の外護の下に、一千人の比丘が会し、帝須を上座として結集を行なったという。当時は外道の徒が衣食のために仏門にはいる者が多く、如来の聖教が正しく行なわれがたくなったので、この結集が行なわれたという。しかし、馬鳴・竜樹等は、阿育王は仏滅後百年に出たといっている。

### 4　第四回結集

仏滅後四百年ごろ、迦弐志加王が出て、北方インドに侵入し、この熱心な仏教信者であった王の保護の下に、迦湿弥羅国において、脇尊者の司会によって五百人の僧が大毘婆沙論の結集を行なったという。ただし、これは四百年とする説と、五百年とする説、あるいは七百年とする説等がある。

以上のようにして経典結集の大事業は進められたのであるが、年代については釈尊滅後の年代が定まらない

ように、不確定のものが多い。しかしながら、仏教の興隆と仏典の結集が、多くの聖僧と強大な武力権力を背景として行なわれたことは疑う余地がない。なかでも、阿育王は深く仏教に帰依し、百二十余人の長老たちを各地に派遣して、仏教の流布にあたったことは特記すべきことである。

## 【中国への仏教伝来】

インドに発生した仏教は釈尊の滅後千十五年を経て中国に伝えられた。すなわち後漢の明帝が金人の夢を見て、使節を大月氏（いまのアフガニスタンから北インド地方）につかわし、迦葉摩騰（摩騰迦）と竺法蘭が永平十年（西紀六七年）に、後漢の都・洛陽にきて、仏像経巻を伝えたのが仏教の初伝とされている。しかし、以上は公式的なもので、仏教がそれ以前から中国の一部に伝わっていたことも事実であろう。すでに阿育大王時代に伝わっていたとする説もある。

この仏教は西域と呼ばれる中央アジアを通って中国に伝えられたのである。この地方は山脈と砂漠ばかりの所であるが、古くから一獲千金を夢みる商人たちの交易路が開けていた。いわゆる有名な絹街道（シルク・ロード）である。西から東へ、東から西へと、南北両道に分かれた絹街道こそ、東西を結ぶ最も重要な公路であった。南道、北道、天山北路と三つに分かれていた細い貿易路を通って、仏教は中国に伝来したのである。東晋の法顕、唐の玄奘、またマルコ・ポーロが往来したのもこの交易路であった。漢帝国がこの地方に対する西域経営を開始したのは、武帝の時代に張騫を派遣したことに始まる。種々の珍しい西方の物産が中国に運ば

れ、東西交易は以後ますます活発化していった。そしてこの辺境には、インドの阿育王の伝道使派遣以来、仏教が伝わっており、これがまず隊商によって東方にまで伝えられた。

漢代は儒教をもって国教とし、政治の基本方針としていたのであるが、その国力の衰退と共に、社会不安による民心の動揺が起こり張角による太平道、張陵の五斗米道のような民間信仰が弘まりつつあった。このように動揺した中国社会に、仏教は漸次根をおろし始めたのである。

## 【法華経の新訳・旧訳】

後漢以来、徐々に行なわれてきた経典漢訳の事業は、国家の保護の下に行なわれるようになり、鳩摩羅什の出現によって、大いに発達した。羅什三蔵は西域の亀茲国の人であるが、鳩摩羅炎を父とし亀茲国王の妹を母として生まれた。七歳のとき出家し、九歳のとき母に連れられて、カシミールで槃頭達多から小乗教を学び、ついで莎車の須利耶蘇摩について大乗教を学び、帰国後はもっぱら大乗を研究し宣揚した。その名声は西域のみでなく東国にも伝わった。

前秦の符堅は、この名声を聞き、建元十八年（西紀三八二年）に、部下の将軍・呂光に、亀茲国を打ち羅什を連れて帰るように命じた。呂光は軍勢を率いて西域に向かったが、帰国の途中、符堅の滅亡を聞き、姑蔵（甘粛省武威）で自立した。ために羅什も、この地に留まること十数年、後、後秦の姚興王に国師の礼をもって迎えられた。彼は都・長安の西明閣、逍遙園において訳経に従事し、大寺において講説した。経論の漢訳に

おいては、国家の援助の下に天下の人材をもって行なった。

従来の経典漢訳においては、外国語に通じないための誤訳や、訳者による抄訳が多かったが、羅什は多くの外国語に通じていたので、初期の漢訳経典の誤謬を正し、また全訳して経典の完璧な翻訳を行なったのである。羅什は七十四部三百八十四巻にわたる多くの経典を漢訳した。そのなかには、大品般若、小品般若、首楞厳経、維摩経、十住経(十地経)、法華経などの経典や、大智度論、中論、十二門論等の論釈書があり、いずれも珠玉の名訳であった。弘始十五年四月十三日(一説に弘始十一年八月二十日)年七十歳で亡くなったが、「羅什舌焼けず」の現証を残し、翻訳の最も正確であったことを証明している。

なお羅什前後の訳経家として、永嘉四年に西天竺の沙門仏図澄が洛陽へ来て、翻訳の業を行なうと共に、多数の弟子を養成した。仏図澄の弟子・道安も、また訳経に講経に活躍したので有名である。

安帝の隆安三年には、法顕が遠くインドへ旅行して経典を求めている。その他、仏陀跋陀羅、曇無讖等、当時は訳業に従事した高僧が多数あった。次いで陳の代には真諦三蔵が摂大乗論、倶舎釈論等を訳出した。唐代にはいると玄奘が貞観三年より、十六年にわたって求経の大旅行をし、多数の経典を持ち帰って翻訳した。羅什や真諦を旧訳といい、玄奘を新訳という。

## 【日本への仏教伝来】

釈尊の説いた仏教は、インドから中国、朝鮮、日本へと伝わってきたのである。すでに羅什の師である須

梨耶蘇摩は、羅什に「仏日西に入って遺耀将に東に及ばんとす、この経（法華経のこと）は東北に縁あり、汝つつしんで伝弘せよ」といっており、法華経は中国から朝鮮を経て、西紀五五二年（仏滅後千四百年ごろ・西紀五三八年の説もある）わが国に伝わった。すなわち、朝鮮の一国であった百済の聖明王が、欽明天皇の御代に仏像、僧尼などと共に渡したのがはじめである。

この外来の宗教をめぐって、革新派の蘇我氏（崇仏派）と保守派の物部氏（廃仏派）とが争ったが、結局、蘇我氏が勝利を収めて、仏教はわが国に根をおろすことになった。

その後、聖徳太子は、法華経と勝鬘経と維摩経の三経を、国家鎮護の法と定め、崇重し、また法華経義疏四巻を著わした。

さらに、聖武天皇は、各国分寺において法華経を書写せしめ、崇重した。

また村上天皇は、母の供養として法華経八巻を宮中にて講義させたが、これを法華八講といい、後、法華十講、法華三十講などの儀が、貴族の間で弘まった。

間もなく、平安時代の初期に伝教大師が出現し、桓武天皇の前で当時の邪宗派たる奈良の六宗の僧と法論し、これをことごとく打ち破ったので、ここに法華経迹門の教えが日本に広宣流布し、志を継いだ義真の手によって比叡山に迹門の戒壇が建立されたのである。

その後、叡山は、第三代座主の慈覚のときに、真言の邪義を取り入れて謗法の山と化してしまった。

しかし鎌倉時代にはいってから、日蓮大聖人がご出現になり、四箇の格言によってあらゆる邪宗派を打ち破り、法華本門寿量品文底の法門を弘めて、末法の一切衆生を救われたのである。

# 【日蓮大聖人のご一生】

日蓮大聖人は、安房国長狭郡東条小湊の漁村に承久四年（西紀一二二二年）二月十六日に誕生した。父は三国の太夫、母は梅菊である。

天福元年（西紀一二三三年）、十二歳の時、ほど近い清澄寺に登り道善房を師とし天台、真言の学を修め、それから出家剃髪して是生房蓮長と改名した。

ついで鎌倉へ出て禅宗、浄土宗の教義を学び、比叡山に登って宗教の奥義をきわめ、数年にわたって京都・奈良・高野山等をも回り研学に努めたのである。

建長五年（西紀一二五三年）四月二十八日、御年三十二歳の時、故郷に帰り、清澄寺の諸仏坊の持仏堂の南面で題目を唱え、諸宗の邪義を破して立宗の第一声を放ったのである。ついで鎌倉へ出て名越の松葉ケ谷に庵室を結び、大法弘通に努めたのである。

当時の世相は天災が相続き、飢饉や疫病と民衆の困苦は日に日に募るばかりであった。日蓮大聖人は人々の不幸に陥る根本の原因が邪宗教にあると見抜かれ、文応元年（西紀一二六〇年）に立正安国論をしたため宿屋入道を仲介に、執権北条時頼を諫暁した。

幕府はこれを用いないのみか、諸宗の悪徒は結束して草庵に放火し、ようやく難をのがれた日蓮大聖人を捕えて伊豆の伊東に流罪、日蓮大聖人は、弘長元年（西紀一二六一年）五月十二日より足かけ三年の間を伊東に

すごしたのである。

赦免になり鎌倉へ帰り、ついで故郷の安房へ帰省の途中、小松原で地頭・東条左衛門尉景信に襲撃され、弟子は殺害され日蓮大聖人もまた額に傷を負わされたのである。

文永五年（西紀一二六八年）には立正安国論の予言が的中して蒙古国より牒状が到来した。日蓮大聖人は、また鎌倉へ上り松葉ケ谷にあってあらゆる迫害のなか、弘法に努め、十一通の書状を認めて政府の役人と、当時有名な高僧に警告を発したのである。幕府は蒙古の襲来におびえながらも日蓮大聖人の警告状には耳もかさず、各宗派は厳然たる日蓮大聖人の御状に接しては、公然と対論することもできなかった。

文永八年、良観の雨乞い等、日蓮大聖人の現証の上の勝利によって、仮面をはがされた邪宗は幕府と結託し、日蓮大聖人を捕えて竜の口に送り、九月十二日の夜、首をはねようとした。その首謀者は、平左衛門であった。

しかし不思議な事件によって、ついに切ることができず、斬罪はとり止めとなり佐渡へ島流しと決定し、これより四か年の間、北海の佐渡島で不自由な生活を送ることとなったのである。

佐渡においては数百人の僧侶が塚原の三昧堂へ押し寄せたり、たえず迫害を加えられ、雪と寒さは、さらに困難を加えた。

しかし一方、竜の口の法難以来、いよいよ日蓮大聖人は久遠元初の御本仏としての確信に立たれ、房総、鎌倉方面の信者に対して開目抄、観心本尊抄の重要な御抄を送られ、末法の本仏・人本尊は日蓮大聖人であり、法本尊は文底下種事行の一念三千であることを明かされた。

鎌倉幕府は日蓮大聖人をいったんは佐渡へ流罪したものの、罪も過失もないことゆえ文永十一年（西紀一二七四年）に日蓮大聖人は赦免され、鎌倉へ帰られたのである。平左衛門尉は早速、日蓮大聖人と対面してなにかと問答があったが、一時的・外面的な幕府の優遇策にすぎず、日蓮大聖人はそれらを一蹴して「三度諫めて用いられなければ」の古賢の例によせ、御弟子・日興上人の誘導で身延山へはいられた。

これより九か年の間、身延山にあって御弟子の養成と折伏戦の総指揮をとられ、各地には強信の弟子檀那が散在して折伏弘通に努めた。なかにも富士方面には日興上人の指導下に折伏の布陣が張られ、弘安二年（西紀一二七九年）には熱原の大法難が勃発し、信者のうち三人が斬罪に処せられ、十七人が追放された。これを機会に日蓮大聖人は、弘安二年十月十二日、本門戒壇の大御本尊を建立せられて、出世の本懐を遂げられたのである。

弘安五年（西紀一二八二年）、日蓮大聖人は三大秘法の大御本尊と共に、一切のご化導を日興上人にお譲りになり、弘安五年十月十三日、武州池上邸にて御年六十一歳をもって、ご入滅あそばされたのである。

三大秘法のうち、本門の題目と本門の本尊は、以上のごとくして建立せられたが、化儀の広宣流布、本門の戒壇の建立は、未来へ遺命せられている。この自覚と確信こそ宗門を知るうえに最も大切な要件である。

## 【国家諫暁】

文応元年（西紀一二六〇年）七月、日蓮大聖人は立正安国論をお認めになり、宿屋入道に付して時の最高の

国家権力者である北条執権最明寺入道時頼に対して、未曾有の国家諫暁を行なった。

すなわち正嘉の大地震をはじめ、うち続く三災七難の相を、最高唯一の大仏法に照らして、破仏法・破国の因縁、正法治国の大原理を示されたのである。

立正安国論（二四・三〇ページ）にいわく、

「如かず彼の万祈を修せんよりは此の一凶を禁ぜんには」またいわく「早く天下の静謐を思わば須く国中の謗法を断つべし」と。

正法誹謗、邪宗・邪義の悪縁を断ち、実乗の一善すなわち三大秘法の大仏法に帰することこそ、政道の根幹であると厳しく諫められたのである。

以来、身を賭して国諫の実践にあたり、文永五年（西紀一二六八年）十月、再度十一通の御状をもって、時の執権北条時宗をはじめ幕府の要路者、ならびに建長寺道隆をはじめとする邪宗の元凶等に対して、公場対決を迫り、速やかに立正安国の正道に入らしめんとしたのである。

時あたかも日本は大聖人の予言のごとく正法誹謗の仏罰厳然として、西戎大蒙古国による他国侵逼の難に脅かされていた。

しかし、時のいたらざるか、忠言耳に逆らうのたとえどおり、この忠諫に、国賊、悪侶の汚名、数度の大難をもって報いたのである。

文永十一年（西紀一二七四年）五月、ついに政都・鎌倉を去り、身延に入山され、その後も禁廷上奏の諫状をしたためては、弟子・日興上人、日目上人をして献覧に供され、以来、国諫の大精神は脈々として御弟子

に受け継がれて現在にいたったのである。

歴史は移り変わり、現在は主権在民の時代である。

一人一人へ妙法を流布することが最大の国家諫暁であり、また妙法を持った一人一人が、自己の属する社会の建設に活躍することが、立正安国の実践といえよう。

第二代戸田城聖会長の原水爆宣言は、全世界の指導者に対する峻厳なる一大諫暁であり、その恩師のご遺訓を、大精神を、身をもって実践し、世界広布の先駆をきって前進される池田会長こそ、国家諫暁の実践者である。

池田会長は「力強い大折伏の戦い、本尊流布の戦いこそ無言の国家諫暁である」といっている。主権在民の時代、社会にあっては、必ずすべてのことが民衆の世論に反映されねばならない。したがって広宣流布するためには、政治に経済に教育に、また言論にと、社会のあらゆる面に、王仏冥合という国家諫暁の精神が反映されねばならない。

王仏冥合の大思想を身につけた多くの人材が、社会のあらゆる階層に輩出することこそ、民衆の世論の上に偉大な力を発揮し、真に国家諫暁を実践推進しうるものである。

## 【日興上人】

宗史の正しい流れを知り、日蓮大聖人の御本仏としての化導を正しく知るためには、日興上人の立ち場を正

しく認識していかなければならない。

日興上人は甲斐国中巨摩郡大井の生まれ、父は遠江から移ってきた大井橘六、母は妙福であった。幼少のおり父が亡くなり、母は武蔵の綱島家へ再縁せられたので、母方の富士河合の由比家に養われた。成長して岩本の実相寺に上り、出家して伯耆公と呼ばれた。日蓮大聖人が岩本実相寺にご入蔵のおり、高徳をしたって弟子となり、後に白蓮阿闍梨と法名を賜わった。

ついで日蓮大聖人にお供して鎌倉へはいり、伊東流罪のおりにも、常に随ってご給仕申し上げ、伊豆に佐渡に、折伏の縁を結ばれて後年まで日興上人の法縁に浴する者が数多くできた。またその間に書道に達しておられたため御代筆をされ、御本尊の代筆までされている。

実相寺は天台真言であり、日蓮大聖人の門下となった日興上人等は院主と常に闘争していたが、ついに官権の手によって擯出され、やむなく一時四十九院に退去することになった。しかし、さらに障害が出て信者の家に身を寄せ、そうしたなかで八方に弘法していた。その後、実相寺は腐敗堕落がはなはだしくなり、後には粛清されて、日興上人等は旧寺に戻ることができた。

また熱原法難には日興上人の直弟子の日秀・日弁が活躍し、南条時光も外護の任にあたったが、ついに神四郎等三人が斬罪に処せられた。このとき日蓮大聖人は日興上人の格別なる化導、活躍を嘉せられて、本門戒壇の御本尊をご図顕され、日興上人に付嘱されたのである。

弘安五年（西紀一二八二年）、日蓮大聖人ご入滅のおりには、その記録を記され（御遷化記録という）、御骨を奉持して身延山へはいり、御遺状どおり身延山の別当職に就任した。他の五老僧はおのおの本国へ引き上げ

て行った。墓輪番を制定しておきながら、その後は誰一人、身延へくる者もなく、しぜんに一切を日興上人におまかせの体であった。

三回忌を過ぎて民部日向が身延に登山してきたので、日興上人は喜んで学頭職につけられた。

しかし、当時門下は、すでに硬・軟に分かれ、信心・修行・教義等すべて日蓮大聖人のご在世どおりに実行する謹厳な日興上人に対し、五老僧等は世間に迎合して天台沙門と名乗ってまで幕府の迫害をのがれようとしていた。

身延の地頭・波木井氏は次第に日向の軟風に染まり、数々の謗法をあえてするにいたった。（四箇の謗法といい、三島明神に参詣したり、邪宗の念仏に供養をした）日興上人は何度も波木井氏を諫められたが、いっこうに聞き入れず、このままでは日蓮大聖人の正義を顕揚することができないと、熟慮万考のすえ、ついに正応二年（西紀一二八九年）春、身延山を出発され、河合の由比家にいたり、ついで南条家の持仏堂（いまの下之坊）に移られ、大石が原に本寺を選定された。

御大坊ができあがるや本六の日目坊蓮蔵日華坊寂日日秀坊理境日禅坊南之日仙坊百貫日乗坊了性等が支院を次々に建立して御大坊を守護せられた。

大石寺の完成後、日興上人はほど近い重須郷に移られて新進の弟子を養成され、後年に日代・日澄・日道・日妙・日亳・日助等の新六が輩出した。

日興上人は富士へ移られてから四十余年の後、一切を第三祖日目上人に付嘱せられて正慶二年（西紀一三三三年）八十八歳の高齢をもって遷化された。

## 【六老僧】

日蓮大聖人は御入滅にあたって、弘安五年（西紀一二八二年）十月八日、六老僧を定められた。蓮華阿闍梨日持、伊予公日頂、佐土公日向、白蓮阿闍梨日興、大国阿闍梨日朗、弁阿闍梨日昭の六人である。

日興上人が記録された「御遷化記録」によると、その冒頭に「弟子六人事　不次第」とあり、六人の連名の順序は入門の順に記されたもので、上下の差別はないとの意が明記されている。このことは非常に大事な点で、年齢や法臘などにかかわりなく、六人を平等にあつかわれており、この平等であるということを一重立ち入って読んでいくとき、むしろ上を押えて下をあげるというご真意をうかがうことができる。すなわち日興上人が第二祖として付嘱を受けたからである。

法臘の順からいっても、最長老であり、六十二歳の日昭、また法臘では第二の四十歳の日朗、いずれも日興上人にとっては、先輩にあたる人たちである。そのなかで、智徳ならびに秀でたとはいえ、三十七歳の日興上人にご付嘱あそばされるについては、日蓮大聖人のご配慮の深さ、凡慮をもって推することはできないが、その一端を拝する感がある。

**日昭**　承久三年（西紀一二二一年）、下総国海上郡能手の郷に生まれた。十五歳で出家して比叡山に登り、天台宗を学んだが、その間に日蓮大聖人に会い、立宗の年である建長五年（西紀一二五三年）、鎌倉・松葉ケ谷の草庵をおとずれ、内弟子となった。この時の日昭は、すでに三十三歳であった。それ以来、主として鎌倉

方面の布教にあたり、大聖人入滅の弘安五年には、六十二歳で門下では大長老であり、その後は、鎌倉浜土にあって、めぼしい活動は見られず、最も保守的な存在であったようである。

**日朗**　寛元元年、下総国平賀に生まれ、母が日昭の姉であった関係から、建長六年、十二歳の時、大聖人門下となった。大聖人が佐渡にご流罪のときには、鎌倉で土牢に入れられたりして戦った。活動の中心は鎌倉、池上方面であったようで、鎌倉の比企谷の妙本寺、および池上本門寺の開基になっている。大聖人ご入滅の時は四十歳。性質は温順といわれており、行動的には勇猛果敢ではなく、妥協的な面は十分うかがわれるようである。

**日向**　建長五年、房州の男金村に生まれ、文永元年（西紀一二六四年）、十二歳の時に大聖人の門に入る。その活動面は、房総方面を主としていたようであり、建治二年（西紀一二七六年）、清澄寺の道善房が死去したときに、報恩抄を奉持して清澄寺に使いした。一時、富士方面の日興上人の弘教の手伝いもしたことがあるようだが、ごく短期日だったようだ。大聖人ご入滅の時は三十歳であったが、性質は放逸で、世法的に長じていた模様で、いわゆる小才子であり、五老師敵対のなかでは、その元凶的な存在で数々の謗法を波木井に勧めている。また大聖人ご入滅の時も、翌年の百か日法要にも、日頂と共に他行して、いずれも不在であったのも、不思議を感ぜられる。上総の藻原方面に檀徒をもっていた。

**日頂**　建長四年（西紀一二五二年）、駿州富士郡重須の郷に生まれたといわれているが、はっきりした史料はない。幼くして父を失い、母が下総若宮の富木胤継に再婚したので、日頂もまた、その義子となったといわれている。文永四年（西紀一二六七年）、十五歳の時に大聖人門下となる。ご入滅の時には三十一歳、富木殿

の関係から下総方面の布教にあたっていたようで、下総真間の弘法寺に住んでいた。三回忌のおりに不参加で富木殿に勘当されたという話もあるが、これは伝説に近いようである。ただし、晩年、下総を離れて富士重須の日興上人をたずね、重須に住し、そこで入寂されている。特記すべき功績は、あまり見られない。

**日持**　建長二年（西紀一二五〇年）、駿河国庵原郡松野の生まれ。松野六郎左衛門の子で、南条家とも親類筋にあたっている。蒲原荘の四十九院に登り、文永七年（西紀一二七〇年）、二十歳の時に日興上人の折伏によって、大聖人門下に加わった。弘安元年（西紀一二七八年）には、日興上人と共に、四十九院を追われる難にあった。ご入滅の時は三十三歳。その後は、松野から海外布教に旅立ったといわれている。

以上のように、房総方面には日頂、日向、武州、鎌倉方面には日昭、日朗、甲州駿河方面は日興上人と日持が、活動の中心となっていたようである。今日のように交通機関が発達していないし、日蓮大聖人の化導は、題目、本尊、戒壇という順であり、当時は題目流布で功徳のあったところから、地方在住の老僧たちが、真の本尊論を理解しえなかったこともありえようし、日興上人が常随給仕をなされていた点からも、真に付嘱を受け、正しく伝持されたのは日興上人ただ一人であることは、厳然たる事実なのである。

## 【二箇相承】

仏法に相伝の必ず必要なことは、諸御書に明らかである。

顕仏未来記（五〇八ページ）　伝持の人無れば猶木石の衣鉢を帯持せるが如し。

一代聖教大意（三九八ページ）　此の経は相伝に有らざれば知り難し。
一代聖教大意（四〇四ページ）　此の法華経は知らずして習い談ずる者は但爾前の経の利益なり。
相伝のない者は、その奥底を知らないのみか、木石にも等しく、功徳のあるはずがないという文である。
しこうして相伝は唯一人に授けられる。釈尊は上行菩薩に、天台は章安に、伝教は義真にそれぞれ付嘱している。
日蓮大聖人のご付嘱は唯授一人の日興上人であらせられることは、二箇相承（一六〇〇ページ）に明らかである。総じていえば、日蓮大聖人直流の門下にすべて相伝があるといえるが、別していえば法体の相承は唯一人に限るのが当然の理である。
身延相承書（一六〇〇ページ）　日蓮一期の弘法、白蓮阿闍梨日興に之を付嘱す、本門弘通の大導師たるべきなり、国主此の法を立てらるれば富士山に本門寺の戒壇を建立せらるべきなり、時を待つべきのみ、事の戒法と云うは是なり、就中我が門弟等此の状を守るべきなり。（総付嘱書）
池上相承書（一六〇〇ページ）　釈尊五十年の説法、白蓮阿闍梨日興に相承す、身延山久遠寺の別当たるべきなり、背く在家出家どもの輩は非法の衆たるべきなり。（別付嘱書）

## 【身延離山】

日蓮大聖人は、日興上人へ、戒壇建立の遺命をされ、入滅に先立って「身延山久遠寺の別当たるべきなり」

と、一宗の総貫主としての付嘱をなさり、武州池上で入滅された。弘安五年（西紀一二八二年）十月十三日のことである。その後、日興上人がご遺命どおりに、身延へ入山され、一宗の中心として立たれたことはいうまでもない。

弘安六年正月に門下の主な弟子方十八人が、一か月ずつ、身延の日蓮大聖人のご廟所を守る当番を定めたが、十八人のうち十人までが、日興上人のお弟子、または孫弟子であることから考えても、日興上人が門下の中心であったことがわかるのである。しかし、その輪番も守られることなく、五老僧たちは、身延へ登山もしなかったのである。

弘安八年ごろ、民部日向が、ただ一人、墓参のため身延へ登山した。日興上人は喜んで、特に学頭職にして、ねぎらわれた。しかし、日蓮大聖人の仏法を、あまり知らなかった日向は、鎌倉の五老僧たちの軟風を、地頭・波木井実長入道日円にふきこんだのである。そのため、実長は「神社に参詣する、謗法の福士の塔の供養、九品念仏の道場に供養する、釈迦仏像を造立する」などの四箇の謗法を重ねて、日興上人の訓戒も、聞き入れようとはしなかった。

ここにおいて「地頭不法ならん時は、日蓮が魂はこの山に住まず」とのご遺言のままに、日興上人は、令法久住のため、謗法の山と化した身延を離山される決意を固めたのである。

すでに日興上人の心は謗法の山と化した身延を去り、広大な広宣流布の指揮をとられる場所を求めていたといえよう。

原殿御書（富要八巻一一ページ）　身延沢を罷り出で候事、面目なさ本意なさ申し尽し難く候へども、打ち還し案

じ候へばいづくにても聖人の御義を相継ぎ進らせて世に立て候はん事こそ詮にて候へ、さりともと思ひ奉るに御弟子悉く師敵対せられ候ぬ、日興一人本師の正義を存じて本懐を遂げ奉り候べき仁に相当りて覚え候へば本意忘るること無く候。

正応二年（西紀一二八九年）春、身延を離山された日興上人は、まず河合の養家に休まれ、それより上野にいる南条時光の請いに応じて下条にある南条家の持仏堂（現在の下之坊）にはいられた。これより約半里を隔てた大石が原の勝地に、正応三年（日蓮大聖人滅後九年、西紀一二九〇年）十月、日目、日華、時光、新田信綱等が力を合わせて大坊を完成した。ここに、弘安二年（西紀一二七九年）十月十二日ご建立の本門戒壇の大御本尊をはじめ、一切の霊宝が安置されたのである。

## 【原殿御書】

日興上人が身延を離山されるにあたり、お弟子の原殿に与えられた御書を「原殿御書」という。この御書は、その当時のいきさつ、日興上人のご心境等が述べられている大事な御書である。

原殿御書（富要八巻一一ページ）身延沢を罷り出で候事、面目なさ本意なさ申し尽し難く候へども、打ち還し案じ候へばいづくにても聖人の御義を相継ぎ進らせて世に立て候はん事こそ詮にて候へ。

この御文は、本門弘通の大導師として身延山久遠寺の別当として、令法久住の大使命感に立たれたご心境なのである。

「いづくにても聖人の御義を相継ぎ進らせて世に立て候はん事こそ詮にて候へ」と。〝聖人の御義〟とはすなわち三大秘法の仏法であり、〝世に立て候はん〟とは日蓮大聖人の仏法を令法久住して広宣流布すべきことである。これこそ日蓮大聖人のご遺命であり、付嘱を賜わった日興上人の大使命なのである。

してみれば、すでに日興上人の一門以外は五老僧も地頭もすべて師敵対謗法の者と化したとはいえ、身延を捨て、離山されることは、別当として身延を賜わった御身にとって堪え難いことではあるが、日蓮大聖人の仏法を曲げることはなおさら堪え難いことである。しかしながら、身延に対して日蓮大聖人は絶対的法城とのお考えが毛頭なかったことであり、そのことは三大秘法抄、身延相承書に「最勝の地をたづねて」とあるように、戒壇を建立すべき場所が身延でないことは、はっきりしていることであるから、むしろ離山は当然のことであった。むしろ、広宣流布の総指揮をとるべく、未来に向かっての洋々たる出発であったといえよう。

「さりともと思ひ奉るに御弟子悉く師敵対せられ候ぬ、日興一人本師の正義を存じて本懐を遂げ奉り候べき仁に相当りて覚え候へば本意忘るること無く候」と。これこそ日蓮大聖人の正義たる三大秘法を令法久住せんがために、離山される日興上人のご決意である。

## 【熱原法難】

天台宗（後に天台真言となる）滝泉寺は、現在の富士郡鷹岡町大字厚原にあって、郡内一、名の知れた大寺であった。時の滝泉寺院主代・行智は、富士方面一帯にわたる日興上人の大折伏により、滝泉寺僧日秀・日

弁・日禅等はおろか多くの人々が改宗していくのをみて、大いに驚き、これらの人々に改心を迫り、聞かなければ寺から追い出すとおどかした。

しかし日秀・日弁・日禅の三人はかえって行智の迷妄を開かしめようとしたので、ついに行智の怒りが爆発し、有無をいわさず、その所職と住坊を取り上げて追放を申し渡したのである。

やむを得ず日禅は河合に帰り、日秀・日弁は、よるべき所もないので、ひそかに寺中にとどまり、弘教につとめていた。こうしたなかで熱原郷は、百姓神四郎、弥五郎、弥六郎等の熱烈な信徒が多数活躍するようになったのである。そこで院主代・行智は奸策をめぐらして、神四郎等の長兄である弥藤次入道が、弟たちと合わず、大いに法華誹謗をしているのを甘言を用いて腹心とし、また、代官下司等を語らって太田親昌、長崎時綱等の武士と組み、また大進房、三位房が日興上人にねたみをもっているのを利用して離反せしめて、時をうかがっていたのである。

しかし、日秀等に教化せられた神四郎、弥五郎、弥六郎兄弟をはじめ、法華講衆の信徒は意志強固であって、ますますその信仰を固めるのみであったから、行智の行動はいよいよ兇暴化し、四月には信者・四郎坊を傷害し、八月には弥四郎の首を切ったのである。

しかもこの罪科を日秀・日弁あるいは法華信徒に転嫁するという言語道断の所業にでた。それにも飽きたらず、なお奸策の罠を張ってひそかに待ちかまえていたのである。

弘安二年(西紀一二七九年)九月二十一日、日秀等が稲刈りの真っ最中、彼らは大挙して弓馬をもって百姓に乱暴の限りを尽くし、神四郎、弥五郎の兄弟以下二十人を縛ると、無謀にも政所へと引き立てて行ったのである。

急を聞いた日興上人は、この邪智奸策を憎み、信徒の悲嘆を思いやり、かつは宗門の一大事でもあったので、ただちに身延へ馳せ、日蓮大聖人の旨を受けて滝泉寺申状を認められ、日秀・日弁を従えて鎌倉に馳せ、両師の名をもって問註所へ訴願したのである。

しかし、この取り調べにあたったのは、日蓮大聖人を虐げ生命まで奪おうとした平左衛門尉頼綱であり、裁かれる者は頼綱が蛇蝎のごとく憎む法華の信徒であるがために、理を非に曲げるのは当然であった。

十月十五日、頼綱は、神四郎、弥五郎等の二十人を自邸の広庭に引き出し、事件の取り調べには少しもふれずに「汝等速かに法華の信仰をやめて念仏を唱えるならば、即座に罪科を赦してやろう。もし否と申せば厳罰に処す、よくよく思案を定めて返答いたせ」と厳しく申し渡した。

神四郎は昂然として「私どもに法華経を捨てよと仰せられますが、身を殺しても法を護るのが私どもの本業でございます」ときっぱりいい放ち、しかも法義を説いて逆に改宗を求めるという不敵の態度に、傲慢な頼綱は烈火のごとく怒りたけった。

飯沼判官と呼ばれる頼綱の次男は、蟇目の矢をつがえて神四郎等をめがけて発矢とばかり次から次へと放ち始めた。しかし、少しも改宗の色を見せないので、神四郎以下二十名の者は、再び牢舎の中に幽閉された。

日興上人は、この日この残虐を耳にして深く心を痛められ、かつは神四郎等一同の堅き護法の精神に感激されて、即座に急使を立てて、この趣きを身延へ報告した。これを聞かれた日蓮大聖人もまた深く感嘆され、早速御返書が送られてきた。その内容は、神四郎等は、釈迦多宝十方の諸仏に護られて寂光の宝刹に安住するであろうが、平左衛門尉は先に日蓮を虐げて国難を惹き起こし、その前途未だ危きにもかかわらず、いままた大

罪を重ねるとはその末路はまことにあわれむべきであるとの仰せである。そのとおり、平左衛門尉父子は、その後十四年を経て謀叛を起こし、同じ邸で殺されている。

神四郎等の二十人は、その後獄中に投ぜられること半年、そのあいだ唯一心に題目を唱えて信仰ますます強盛であったが、弘安三年（西紀一二八〇年）四月八日、神四郎、弥五郎、弥六郎の三兄弟は刑場に引き出され、発頭人という廉によって斬罪に処せられ、残る十七人は付和雷同の従犯者として追放された。この三人は護法殉教の烈士として後人を導き、その名は長く宗史を飾っている。

## 【提婆達多】

提婆・調婆達多・調達等ともいう。訳して天熱という。

提婆達多は釈尊の従弟で、初め仏弟子となりながら、ついに釈尊に敵対して、生きながら大地破れて地獄に落ちた大悪人である。

すなわち、提婆は斛飯王の子、阿難尊者の兄であり、釈尊には従弟として生まれた。その出生のとき、諸天が成長の後三逆罪を犯すことを知って心に熱悩を生じたので天熱と名づけたという。また天授とも訳す。釈尊の八万法蔵、外道の六万蔵を誦持し、出家して神通を学び、学道は大いに進んだが、心が憍慢であり虚栄利欲の俗念が強く、深く釈尊をうらみ、ついに三逆罪を犯した。第一に大衆に囲繞されたら仏と同じであると考えて、釈尊の和合僧団を破り、五百の弟子を得た。（破和合僧）第二に山を押して仏を圧死させようと耆闍崛山

の上から釈尊めがけて大石を落としたが、地神がそれを受け止めた。その砕石が飛び散って釈尊の足指を傷つけた。（出仏身血）第三に蓮華色（華色）比丘尼がこれを呵責するや拳をもって尼を打ち、即死させたという。（殺阿羅漢）このような三逆罪をつくり、悪邪師・富蘭那外道と親しく交わり、善根を断じても恥じ悔いることがなかった。また阿闍世太子をそそのかして父・頻婆沙羅王を殺させ釈尊に敵対させた。また、あるとき悪毒を指爪につけ釈尊を礼すと同時に傷をつけ殺害しようとして果たさず、王舎城のなかで大地が自然に破裂して、生きながら地獄にはいったという。

しかも釈尊は法華経提婆達多品において、過去の因縁を説き、過去世に提婆は阿私仙人といい、そのとき国王であった釈尊は、王位を捨てて阿私仙人に千年間仕えて、成仏したとしており、提婆が善知識である功徳を説いて、成仏の記別を与え天王如来と記された。竜女の成仏とならんで法華経へきて初めて悪人成仏が説かれたのである。

観心本尊抄（二四〇ページ）経に云く「提婆達多乃至天王如来」等云云地獄界所具の仏界なり。

## 【阿育大王】

阿育大王は、インド・マウリヤ朝第三代の王（在位・前二七二～二三二年等諸説あり）である。その年代は仏滅後一〇〇年ごろ、一一六年、二一八年の説がある。釈尊の予言どおり仏滅後百年ごろ出現し、仏教を保護し、立派な政治を行ない、その国威は外国にまでおよんだ。

阿育大王は、摩竭陀国賓頭沙羅王の王子として生まれた。出産のときに母が憂悩なしに生まれたので阿育と名づけたという。幼時より非常に頑健・兇暴であり、父王に愛されなかった。父王の死後多くの兄弟を滅ぼして自ら王位について、反対する諸臣、女人等を焚殺し、そのほか残酷をきわめたので暴悪阿育王と称せられた。しかし軍略にすぐれ、戦争で連戦連勝して四方の国を平定し、全インド統一の大偉業を成し遂げ、いわゆる一閻浮提四分の一の王となった。

その後、残虐な行ないを悔悟し、付法蔵の第四祖・優婆掬多尊者の教えを受けて深く仏法を信じ、性情一変して武力による征服をやめ「法による勝利こそ最上の勝利である」という信念のもとに、仏教流布に努めた。こうして阿育大王は、仏法の慈悲を政治に反映させたので、大いに国が栄えた。

その主な業績は次のとおりである。

一、慈悲のある立派な政治を行なった。

二、一千の長老を集めて第三次の一切経の結集を行なった。

三、仏法流布のため多くの高僧を四方に派遣した。その範囲は、遠くシリア、エジプト、マケドニアにまでおよんだ。

そのほか八万四千の大寺を造り仏舎利を分配し、あるいは教学を振興する等多くの業績があり、現在もその遺跡がみられるが、特に石柱あるいは岩壁等に記された法勅が名高い。

上野殿御返事（一五四四ページ）　月氏に阿育大王と申す王をはしき、一閻浮提四分の一を・たなごころににぎり・竜王をしたがへて雨を心にまかせ・鬼神をめしつかひ給いき、始は悪王なりしかども後には仏法に帰し・

六万人の僧を日日に供養し・八万四千の石の塔をたて給う、此の大王の過去をたづぬれば仏の在世に徳勝童子・無勝童子とて二人のをさなき人あり、土の餅を仏に供養し給いて一百年の内に大王と生れたり。高橋殿御返事（一四五七ページ）付法蔵経と申す経にはいさごのもちゐを仏に供養しまいらせしわらは百年と申せしに一閻浮提の四分が一の王となる所謂阿育大王これなり。

## 【竜樹・天親】

### 竜樹

竜樹は竜猛菩薩ともいわれる。仏滅後七百年ごろ、南インドに出て、大いに大乗の教義を弘めた大論師である。後に出た天親菩薩と共に正法時代後半の正法護持者として名高い。付法蔵の第十三。

竜樹菩薩は南インドのバラモンの大富豪の家に生まれた。生まれつき聡明で、幼少にして四韋陀聖典を解了し、やや長じて天文・地理・道術等、当時の百科の学術に通じたという。やがて感ずるところあって出家し、たちまち小乗三蔵経を読破したが、なお満足できず、東北におもむいて、ついにヒマラヤ地方で一老比丘より、大乗教典を授けられ、大いに得るところあり家義に通じた。そして、弁論巧みに、よく外道を破折し、外道異学は皆服した。しかし、まだ自分は仏経を究め尽くしていないと感じ、静かなところに閉じ籠って沈潜思索していたところ、これを見て哀れんだ大竜菩薩が、神通力で竜樹を伴って大海に入り、竜王の宮殿で秘密の大乗教典を与えたと伝えられている。

学成ってから南インドに帰ったが、この国の王は外道を信じていたので、竜樹はこれを破折するために赤旛

を持って王宮の前を七年間往来した。ついに王がこれを知ったので、あらゆる外道を破折・調伏して大乗を弘め、大いに国王の敬信をうけた。釈尊滅後、ようやく形骸化した仏教を大乗教をもって生活指導の仏法とする偉業を成し遂げ、その著作もひじょうに多い。法を上首の弟子の迦那提婆に付し、キストナ河の上流の黒峰山上の寺院で入滅した。年齢は不明であるが、ひじょうな長寿であったという。

著作として有名なものは「大智度論」百巻、「十二門論」一巻、「十住毘婆沙論」十七巻、「中観論」四巻等である。

## 天親

天親菩薩は、世親菩薩ともいう。仏滅後九百年ごろ、インドに出て「千部の論師」といわれ、大いに仏法を興隆し、とりわけ大乗教を弘めた大論師である。

天親は、北インド健陀羅国の富婁沙富羅城に生まれた。父はバラモンの学者で憍尸迦といい、その第二子であり、兄は有名な大乗の論師・無著菩薩である。

博学多才で出家後、小乗を研究し衆人のために説一切有部の教理大系を示す。毘婆沙を講述し、その講義をつづって「阿毘達磨倶舎論」三十巻を著わした。しかし、初め小乗に執著しすぎたので、大乗を信じないで誹謗した。兄の無著論師は早くから大乗に帰したので、天親を誘化し大乗に帰入させた。天親は深く前非を悔い、昔大乗を誹謗した舌根を割って滅罪しようとしたが、無著の忠告を入れて、滅罪のため、無著の跡を受け、大乗教の弘布に努めた。

ときに阿踰陀に都を定めてインドを統治した超日王および、その子・新日王の厚い外護をうけ、大いに教勢を拡張し諸大乗教の論釈をことごとく作った。その文義が精妙であったため、インドおよび辺土にいたるまで

大小乗の学者は、ことごとく天親の論を根本とし、外道もことごとく畏伏したという。そしてこの地で八十歳で没したと伝えられる。

古来、天親は「千部の論師」と称され、小乗のころ五百部、大乗に入りて同じく五百部の著述をなしたといわれる。現在、著書の存するもの前述の「倶舎論」のほか、「十地経論」十二巻、「唯識論頌」一巻、「摂大乗論釈」十五巻、「仏性論」四巻、「金剛般若波羅蜜経論」三巻、「妙法蓮華経優婆提舎」等である。以上の著述は広く仏教各派に影響を与えたが、とりわけ小乗では倶舎宗、大乗では法相宗（十地論・二十唯論）等の所依の論釈とされた。

天親菩薩は竜樹菩薩と共に「内鑑冷然、外適時宜」と称されるように、内心には諸法の実理を知っていたが、化導には権に説いたところがある。

竜樹、天親については御書に次のように仰せである。

開目抄上（一八九ページ）一念三千の法門は但法華経の本門・寿量品の文の底にしづめたり、竜樹・天親・知ってしかも・いまだ・ひろいいだ（拾出）さず但我が天台智者のみこれをいだ（懐）けり。

撰時抄（二六〇ページ）竜樹・天親等は内心には存ぜさせ給うといえども言には此の義を宣べ給はず、求めて云くいかなる故にか宣給ざるや、答えて云く多くの故あり一には彼の時には機なし・二には時なし・三には迹化なれば付嘱せられ給はず。

開目抄下（二一五ページ）法華経の種に依って天親菩薩は種子無上を立てたり天台の一念三千これなり。

富木入道殿御返事（九五五ページ）天親・竜樹内鑑冷然外適時宜云云。

## 【天台大師】（付南岳・章安）

智者大師の別称。諱は智顗。天台山に住んだので天台大師という。中国の天台宗の第三祖であり、理の一念三千の法門を説いた像法時代の正師である。

伝によれば西紀五三八年――五九七年の人で、梁武帝の大同四年荆州に生まれ、梁が滅亡すると一族は離散し、父母もまたなくなったので、十八歳で湘州の果願寺の法緒に投じて出家した。生誕時も奇瑞があって、幼時から聡明で、また仏乗を志していたといわれる。

二十歳で具足戒を受け律を学び、また陳の天嘉元年、二十三歳の時、光州の大蘇山で慧思（南岳大師）に謁し四安楽行を授けられ法華三昧を行じた。その後、大いに法華経の深義を照了した。後、瓦官寺に住して八年、「智度論」等を講説し高名をはせた。

太建七年（西紀五七五年）九月、三十八歳にして天台山にはいり、仏隴に住んで修行したが、詔によって金陵にいたり、大極殿で智度論、仁王経を講ず。禎明元年（西紀五八七年）、年五十で法華経を講じて章安大師が筆録したのが、有名な「法華文句」である。隋の世となるや、晋王広の帰依をうけ智者の号を賜わる。後、荆州当陽県の玉泉山にいたって、「法華玄義」「摩訶止観」を述べて天台三大部を完成す。その間、南三北七の他宗を信伏せしめ、その後、天台山に帰り、翌年、石城寺で入寂した。年六十であった。

その著述ははなはだ多かったが、なかでも有名な「三大部」のほか、普通「五小部」と呼ばれる「観音玄義」

「観音義疏」「金光明玄義」「金光明文句」「観経疏」がある。

日蓮大聖人も顕仏未来記（五〇九ページ）でインドの釈尊と中国の天台大師と日本の伝教大師と日蓮大聖人とは三に一を加えて法華経の行者の三国四師であるといわれているように、天台大師は薬王菩薩の再誕と称され、像法の法華経すなわち理の一念三千の法門によって、像法の教主として衆生を導いたのである。その後、章安大師、妙楽大師によって弘法され、日本の伝教大師が迹門円頓の戒壇を叡山に建立するにおよんで、まったく天台宗義は完成された。ただし、末法にあっては天台・妙楽・伝教等の渇仰する御本仏日蓮大聖人の教えによる以外には功徳がないのである。

なお、天台大師の師匠である南岳大師、および天台大師の弟子である章安大師について解説する。

## 南岳大師

中国南北朝の法華経の持者で、天台の師にあたる。慧文禅師に法を承け、天台智者大師に伝えた。武津の人で出家後、常に法華経を誦し、あるとき法華三昧を開悟したという。求法の心厚く、天台大師を弟子としたが、陳の光大の初め、南岳に移って太建九年（西紀五七七年）端坐したまま、六十三歳で入寂す。そのとき身は柔らかく、顔色も生けるごとき様だったという。著書には「四十二字門観」「法華安楽行儀」等がある。「立誓願文」は有名である。

## 章安大師

天台智者大師の弟子であり、師の論釈のことごとくを聴取し結集した。諱は灌頂。臨海章安の人で陳の文帝の天嘉二年（西紀五六一年）に生まれ、七歳で摂静寺にはいり、後、智者大師に謁して観法を稟け常随給仕し、所説の法門をことごとく領解した。その聴受の結集は有名な「三大部」をはじめ大小部合わせて百余巻ある。師が亡くなってから「涅槃玄義」二巻、「同疏」二十巻を著わす。名声天下に響き、

三論の嘉祥は章安の「義記」を借覧して天台に帰したという。唐の貞観六年（西紀六三二年）八月七日、天台山国清寺で年七十二歳にして寂した。弟子・智威に法統を伝えた。

## 【妙楽大師】（付道邃・行満）

妙楽大師は中国の唐代の天台宗第九祖、天台大師より六世の法孫で、中興の祖としておおいに天台の教義を宣揚し、実践修行に尽くし、仏法を興隆した。

伝によれば、西紀七一一年、中国の常州晋陵県荆溪に生まれ、家は世々儒教をもって立っていた。諱は湛然。荆溪にいたので荆溪大師とも称せらる。

二十歳で左溪玄朗について天台の教観を学び、すでに大器ぶりを発揮した。天宝六年（西紀七四七年）三十八歳で宿願を達して出家し、研さんに努め、理の一念三千の天台宗義の深義を明らかにし当時輩出していた禅・華厳（澄観）・真言・法相（慈恩）等諸宗の学者の間にあって大いにその謬解を打ち破った。そのなかでも天台大師の三大部の註釈は、天台大師の幽旨を明解にしたものである。天宝の末詔書を賜わり、しきりに宮中に参ずるようにすすめられたが、つねに病と称し固辞して参内しなかった。その後の兵乱や飢饉の際にも修行を怠らず衆生を安んじ、つねに少欲知足であったという。はじめ蘭陵（または毘陵）の妙楽寺に住したので妙楽大師という。次に天台山国清寺にはいり、唐の徳宗建中三年（西紀七八二年）二月五日、仏隴道場で入寂した。年七十二歳、法臘三十四年であった。

著書として天台三大部の有名な注釈がある。「法華玄義」を「法華玄義釈籤」に、「法華文句」を「法華文句記」に、「摩訶止観」を「止観輔行伝弘決」にそれぞれ注釈している。そのほか「維摩経略疏」「金剛錍」「止観大意」等の著書がある。勅諡を円通尊者という。

弟子は伝教大師に法門を伝えた有名な道邃、行満をはじめ、元皓、智度、法征、華雲等すこぶる多く、高弟三十九人、門徒千余人という。法を道邃、行満、元皓に付す。

伝教大師は妙楽大師を十徳を頌して称賛しているが、実に中国における像法時代の理の一念三千の釈義はその時代の衆生済度の法門として、光輝に満ちている。しかし、あくまでも末法御本仏日蓮大聖人の事の一念三千（御本尊）の法門ご出現のための法門であり、かつ、そのために妙楽出現の意義がある。

ゆえに天台大師は「後の五百歳遠く妙道に沾わん」といい、妙楽大師は「末法の初冥利無きにあらず且く大教の流行す可き時に拠るが故に云云」といって、末法御本仏の出現および南無妙法蓮華経の広布を予言し渇仰していたのである。

**道邃和尚**

中国の天台法華の正統を継ぎ、貞元十二年（西紀七九六年）より二十一年にわたり、伝教大師および義真に天台法門を伝えた。二十四歳で具足戒を受け、後、妙楽大師の弟子となり、「止観」「輔行」を授けられ、師の命をうけて楊州・越州等で弘教し天台山国清寺に住した。

**行満座主**

中国の天台法華の僧で妙楽大師の高弟であり、道邃とともに伝教大師に法を伝えた。中国姑蘇の人で二十歳で出家し、その後、妙楽大師の弟子として十五年随逐し、仏隴寺の座主となる。著書に「六即義」一巻「涅槃疏記」十二巻等がある。

# 【伝教大師】（付義真）

諱は最澄。わが国の平安朝時代の天台宗の開祖であり、像法時代に法華経を広宣流布して人々を済度した。西紀七六七年―八二二年の人。父は三津首百枝で、先祖は漢の孝獻帝の子孫・登万貴であるが、日本を慕って帰化した。神護景雲元年（西紀七六七年）に生まれ、幼時より聡明で十二歳で出家し、二十歳にして具足戒を受け、仏法の乱れをなげいて決然と立って衆生救済の大願を起こし、比叡山に登り一心に修行し一切経を学んだ。ついに法華経こそ唯一の正法なるを知り、天台大師の三大部等を学び弘法に邁進した。桓武天皇は大師の徳を感じ、三十一歳にして内供奉に列せしめた。その後、一切経論および章疏の写経、法華会の開催等につとめた。また、大師わずかに三十六歳にして、南都六宗の碩徳十四名を高雄山寺において桓武天皇列席の下、天台法華宗によって、ことごとくその邪義を打ち破り、帰伏状を出さしめた。

三十八歳の時、天台法華宗還学生として義真等を連れて入唐し、仏隴道場に登り、天台大師より七代妙楽大師の弟子、行満座主および道邃和尚について、教迹・師資相伝の義・一心三観・一念三千の深旨を伝付された。

帰国後も天台法華宗の奥義をもって諸宗を破折し、また、金光明・仁王・法華の三部の大乗教の長講を行ない、宇佐八幡の神宮寺で法華経を講じて託宣を受け、紫の袈裟を受けたという。その後も嵯峨帝の信任厚く、殿上で多くの高僧と法論し、大いに打ち破って法華最勝の義を高揚した。ついで迹門円頓の大乗戒壇の建立、および一切を義真に相承して弘仁十三年（西紀八二二年）六月四日辰時、比叡山中道院において、右脇にして

入寂す。ときに寿五十六歳であった。六月十一日、大乗戒壇の建立が聴許され、冬十一月、嵯峨帝は「哭澄上人」の六韻詩を賜うた。伝教大師の著述には有名なものも数多いが、なかでも「法華秀句」三巻、「顕戒論」三巻、「註法華経」十二巻、「守護国界章」三巻等はその重なるものである。

伝教大師は薬王菩薩の再誕たる天台大師の後身といわれ、像法の末、日本国に出現され、人皇五十代桓武天皇、五十一代平城天皇、五十二代嵯峨天皇の厚き帰依をうけて、像法時代の法華経の広宣流布によって平安朝時代の輝かしい文化を生み、いちおう平和な時代を現出せしめたのである。

ただし、あくまでも釈迦仏法の範囲であり、末法では日蓮大聖人の教えによる以外はない。ゆえに伝教大師も末法の御本仏のご出現を予言し、渇仰され、また日蓮大聖人は「彼の天台の座主よりも南無妙法蓮華経と唱うる癩人とはなるべし」（撰時抄二六〇ページ）と仰せられ、御本尊の功徳をお説きになっている。

**義真和尚**　比叡山延暦寺第一の座主である。相模の人で、幼くして叡山に登り伝教大師の弟子となり、師とともに入唐した。伝教大師滅後、法を受け、天長元年座主となり、同四年勅を奉じて迹門円頓戒壇を建立す。同十年七月四日、寿五十五で寂す。著書に「天台宗義集」一巻、「雑疑問」一巻等数部がある。

## 【日目上人】

日蓮正宗第三祖日目上人は文応元年、伊豆国仁田郡畠郷の生まれ、御父は新田五郎重綱である。十三歳の時から同国の走湯山に上り修学されていたが、文永十一年（西紀一二七四年）、日興上人弘教の縁にあわれて弟

子となり、建治二年（西紀一二七六年）、身延山に登り剃髪された。

身延山にあってはよく日蓮大聖人にご給仕申し上げ、毎日、谷川の水を汲みに行くので自然に桶を乗せる頭骨がくぼんでいたという。

日蓮大聖人が池上邸でご休息のおり、叡山の二階堂伊勢法印が問答に乗り込んできた。日蓮大聖人は目師にその討論を命じ、目師は大衆の面前で堂々と相手の邪義をつき、屈伏させたといわれている。かくて日蓮大聖人ご入滅のときには墓輪番十八人の一人に加えられるほど昇進されていた。

日興上人身延離山にあたっては直弟子としてお供し、大石寺が創立されるや、蓮蔵坊を建立して守護にあたった。

すでに日目上人は師の御代官として公家・武家の奏聞をいくたびか果たされ、日興上人はその行体堅固、他に傑出されていることを認められて、正応三年（西紀一二九〇年）十月、お座替わり本尊を授けられ、重須へ移られてからは日目上人が実質上大石寺の主となっていた。

新田家の本領は奥州陸前国登米郡であり、日目上人は再三往来して折伏弘通の実をあげた。現在まで多数の寺院が残っているのがこれである。正慶二年（元弘三年にあたる。西紀一三三三年）北条家が滅亡して王政復古した機会に、日目上人は広宣流布の大願を成就せしめんと、七十四歳のご老体をもって日尊、日郷のお供をつれ、京都をさして出発された。しかるに美濃の垂井において十一月十五日、伊吹颪の吹きすさぶなかにご遷化されたのである。

このようにして広宣流布の大願成就こそ、富士門流の唯一無二の確信となり、伝統となっているのである。

## 【日有上人】

大石寺第九世日有上人は南条家の出身で、中興の師と仰がれている方である。

第四世日道上人の時、郷師が蓮蔵坊一帯の地を目師より相伝したと主張して争いを起こし、それ以来、山内の紛争が七十年にわたって続き、疲弊の果てに出られた方がすなわち日有上人である。

ゆえに日有上人は堂塔の修復、学僧の養成に努められると共に、自ら東は奥州、西は京都、北は佐渡と布教に出られ、永享四年（西紀一四三二年）には天奏を遂げられている。

また諸国から登山する学僧のために、化儀上の諸問題を委細にご指南あそばされ、現在、化儀抄として伝えられている。

化儀抄の終わりには日蓮大聖人を本仏と仰ぐべきことをご教示になっている。

老年にいたり甲斐の杉山に草庵を結ばれて、文明十四年（西紀一四八二年）九月遷化された。この前後に種々の伝説があるのも、皆、有師の高徳を慕う心の現われであろう。

## 【日寛上人】

大石寺第二十六世日寛上人は、日有上人と共に中興の二師と仰がれる方である。上州館林の酒井家の臣で伊

藤市之進といい、江戸で仕官していたが、十九歳の時に発心して出家し、上野下谷の常在寺で剃髪して覚真日如と号された。

二十六歳の時から細草檀林に学び、平素からの修学の功もあって二十六代の能化に進む。正徳元年（西紀一七一一年）、大石寺の学頭として学頭寮にはいり、御書の講義を始められ、ついで享保三年（西紀一七一八年）、宥師のお譲りを受けて二十六代の貫主に就任せられた。三年にして貫主を退き、学寮にはいって、再び講義に専念せられたが、養師のご遷化後また再任して大坊にはいられている。

当門において宗学が隆盛をきわめたのはこの時代が絶頂であるといわれ、四十数人の青壮年学僧を集めて講義が続けられた。また開目抄、本尊抄等の文段を著わされ、日蓮大聖人の御真意をきわめつくされ、その他、宗学の肝要を六巻抄として後世にのこされた。たんに学問のみならず常唱堂や石之坊を建立され、また五重塔建設資金をご遺言状と共にのこされている。

ご入滅の時期をあらかじめお知りになり、一切のご遺言を終わりお暇ごいにまで歩かれて、享保十一年（西紀一七二六年）八月十九日、六十二歳をもって安らかにご遷化あそばされた。

## 【六巻抄】

大石寺第二十六世日寛上人のご述作の書である。六巻抄とは、三重秘伝抄第一、文底秘沈抄第二、依義判文抄第三、末法相応抄第四、当流行事抄第五、当家三衣抄第六、この六巻の総称である。当抄は、当時、むらがり起こった邪義・邪見に対して、徹底的に破折をされた折伏の書であり、宗門の肝要を余すことなく明かさ

れた重要なご述作である。

日寛上人伝（富要五巻三五五ページ）に「同じく（享保）十年乙巳仲春より季夏に至り、当家の大事六巻抄を著述し（題号秘して顕わさず）以て学頭詳公に授け示して言はく、此の書六巻の獅子王あるときは国中の諸宗諸門の狐兎一党して当山に襲来すといへども、敢て驚怖するに足らず、もっとも秘蔵すべしもっとも秘蔵すべし」とある。

日寛上人ご存生の時代は、全国各所に檀林（学校）がもうけられ、時運が学問に集中していたかの観があった。そして、それらの流義はたくみに説くといえども、みな天台の亜流であり文上脱益仏に執するものばかりであり、さらに、それからいつ脱して、流々の門祖の邪義謗法をかばい、末法下種の主師親、宗祖日蓮大聖人の正義を曲解するものばかりであった。

当時までに、邪義をかまえて来た主なものは、次のごとくである。

①身延派日講（本迹一致・身延）②八品派日隆（本迹勝劣・京都）③身延派日朝（本迹一致・身延）④要法寺派日教（本迹勝劣・京都）⑤要法寺派日鏡（本迹勝劣・京都）⑥要法寺派日辰（本迹勝劣・京都）⑦妙法寺派日我（本迹勝劣・保田）

これらの流派は、いずれも大聖人滅後二〇〇年から四〇〇年の間にできたもので、この間、宗門における邪義・邪見のほとんどが出つくし、世間を迷わせていたのである。そして、その最後に日寛上人が出現され（大聖人滅後四四五年）、六巻抄等のご述作により、これらの邪義・邪見をことごとく破折されたのである。その後、今日にいたるまで、どんな邪義が出現しても、日寛上人の破折の域を出るようなものはまったくないといってよく、日蓮正宗の教学は、この時代より大きく発展した。

さらに、六巻抄は、宗学の肝要を後世に残された書として、重要な御抄である。

次に各抄の大意を概略説明する。

**1　三重秘伝抄第一**

享保十年（西紀一七二五年）三月のご述作である。

開目抄の「文底秘沈」の句について、文に三段を分ち義に十門を開いて、文底の大法、文底の仏の何たるかを教えられた。権実、本迹、種脱の三相対の法門を明かされ、この大事を示されたためこの抄号がある。破折の対象は、主として、一致門流、付随して、真言、天台等の権迹も破しておられる。

**2　文底秘沈抄第二**

享保十年三月のご述作である。

文底秘沈の大法は、三大秘法であることを明かされ、破折は各派にわたる。特に、戒壇論では、要法寺日饒と一致派の身延戒壇説を強く破られている。

抄を三部にわけて、本尊編では脱益仏と相対して本門の本尊を、人・法・人法体一によって明かされ、戒壇編では、道理・文証・遮難（しゃなん）によって、富士戒壇を明かされ、題目編では、われらの正法を示され、信心・唱題の肝要なるを明かされている。

**3　依義判文抄第三**

享保十年四月のご述作である。

一切の経釈は、義によって判読していくべきであることを示されている。文上の義に執すれば、一切の経釈

は、みな脱益仏をさしているとみえる。この邪見を正確に破られ、末法の信心を正しく導かれている。三大秘法は、合すれば一大秘法、開けば三秘六秘となる。その義をまず明らかにされ、法華経の要文を法師・寿量・神力品等からひいて、いかに判文すべきかと教えられた。ついで、天台の文意をあげて、その正しい判文を示され、もって大聖人の正義を結せられる。破折は、一致派などである。

**4　末法相応抄第四**

享保十年五月のご述作である。

要法寺日辰の読誦論義と造仏論義を破して、正しい修行、正しい本尊の何たるかを示された書である。すなわち、抄を上下に分け、上においては一経読誦の許されないゆえんを明かして、末法相応の修行は、ただ題目にあることを明らかにされている。下においては、造仏論義に対して破折を加えられ、あるいは、種脱の違いにより、または三徳と人法勝劣等によって、色相荘厳の仏像を立てることが謗法であることをあらわして、大聖人の正意は、事の一念三千の大曼荼羅にかぎることを明かされた。

**5　当流行事抄第五**

享保十年五月のご述作である。

当門流の正しい修行は、唱題を正行とし、方便品、寿量品を助行とすることを明かされている。すなわち、抄を三分し、所破借文のために方便品を、所破所用のために寿量品を、共に助行することを示し、最後に唱題編において、文底下種の三宝を教えて、これこそ正行であると示され、最後に、その正信の功徳、即身成仏の大益を教えられている。破折は一致派と要法寺派が中心である。

享保十年六月のご述作である。

当宗における三衣とは、法衣、袈裟、数珠なることを明らかにしている。さらに、法衣は薄墨色を着し、他の色を用うべからざることを、道理、引証、料簡の三門に分けて説き、袈裟は白色のものを着する意、数珠の由来等を示されている。

## 【四条金吾頼基】

四条中務三郎左衛門尉頼基は、北条の支族・江馬家に仕えた忠臣である。父の跡を受けて江馬光時に仕え、父子二代にわたって忠誠のほまれが高い。

左衛門尉であったことから、唐名で金吾と呼ばれた。金吾は武道にすぐれるばかりではなく、医術にも通達していたといわれ、建長八年（西紀一二五六年）ごろに池上宗仲、工藤吉隆等と前後して、日蓮大聖人に帰依し、以来、鎌倉における、日蓮大聖人門下の在家の中心となり、下総の富木常忍、太田、曾谷殿等と、常に外護の任にあたっていた。

ことに文永八年（西紀一二七一年）九月の竜の口の法難に際しては、その知らせを聞くや、飛んで行き、日蓮大聖人の馬のくつわに取りすがり、殉死の覚悟でお供申し上げたのである。また、佐渡ご流罪中にも自らも行き、またしばしば使いを送り御供養をささげ信心の誠を尽くした。

四条金吾殿御返事（一一九三ページ）既に相模の国・竜の口にて頸切られんとせし時にも殿は馬の口に付いて足歩赤足にて泣き悲み給いし事実にならば腹切らんとの気色なりしをば・いつの世にか思い忘るべき。

日蓮大聖人は、人本尊開顕の「開目抄」二巻を金吾に送られたが、この一事をみても四条金吾の信心と門下における立ち場がわかるであろう。

信心強盛で、また直情径行の性格のため、しばしば同僚と衝突があったり、主君光時を折伏しては、不興をかい、日ごろの金吾の信望に、ざん言が加わって建治二年（西紀一二七六年）には越後へ減俸左遷の問題が起こった。

日蓮大聖人はそれに対して「いかなる事も出来候はば入道殿の御前にして命をすてんと存じ候、若しやの事候ならば越後よりはせ上らんは・はるかなる上不定なるべし、たとひ所領を・めさるるなりとも今年は・きみをはなれまいらせ候べからず」（一一五〇ページ）と教え、金吾はその指導にもとづいて振舞ったのである。

その後にも、桑が谷における竜象房と三位房の法論に連座していたために、主君光時より勘気をこうむった。法華経ならびに日蓮房に絶対帰依しないという起請文を差し出しなさい――ということである。従わない場合は、所領没収という弾圧であった。この時、日蓮大聖人は、四条金吾の一大事のため、おん自ら代筆をされ、江馬光時に与えた諫状が、「頼基陳状」である。その後まもなく主君光時にその至誠が通じ、かえって所領を増す結果となった。

日蓮大聖人が池上でご入滅の際には看病され、ご葬送の時は池上兄弟とともに幡を捧げた。そして大聖人ご入滅の後は、入道して所領の甲州内船に隠居し、正安二年（西紀一三〇〇年）に寂した。

## 【池上兄弟】

池上宗仲・宗長の兄弟は、日蓮大聖人が鎌倉におられた建長年間、四条金吾たちと前後して日蓮大聖人に帰依した。

父の左衛門大夫康光は、鎌倉幕府の作事奉行の職にあり、兄の宗仲は大夫志、弟の宗長は兵衛志に任ぜられ、ともに幕府に仕える身であった。

父・康光は、律宗・極楽寺良観の熱心な信者であったため、池上家では正法と邪法との戦いが繰り返されたのである。

文永十二年（西紀一二七五年）、兄弟の入信いらい二十年前後にして、それは信心強盛な兄・宗仲の勘当となって爆発した。この時、あくまで兄弟が団結して、魔に負けずに信心をまっとうするようにと、日蓮大聖人から賜わったのが「兄弟抄」である。

その後、兄の勘当は一度は許されたが、再び兄が勘当された。この時、ややもすると動揺しがちな弟に対して賜わったのが「兵衛志殿御返事」である。

日蓮大聖人は、弟・宗長に対し「今度はあなたはきっと退転するにちがいない。退転するのをとやかくいわないが、地獄に落ちて日蓮をうらむな。あとはもう知らぬ」と厳しく戒められている。そして、日蓮大聖人の義につこうと思うならば、断固、父に向かっていいきりなさいと指導され、悉達太子が、一時父の心に背いて

も、最後に親を救った例をひかれて、重ねて真実の孝養の道を教えられている。

そして弘安元年（西紀一二七八年）には、ついに父の康光も日蓮大聖人の信仰に帰依することができたのである。弘安二年、父の死に際しては「孝子御書」を賜わり、たびたびの勘当にもかかわらず、兄弟が一致団結して、ついに父を正法に帰依させたのは、「あに孝子にあらずや」とおほめの言葉をいただいたのである。

いかなる困難をも乗り越え、激しく起こってきた三障四魔を打ち破って宿命を打開し、ついに一家の宗教革命を成し遂げたことは、実に、末法の信心修行の明鏡である。

父の死後、宗仲が家督を継ぎ、弘安五年、日蓮大聖人はこの池上邸でご入滅、そのご葬送の時には、宗仲は四条金吾と共に旗を掲げ、弟の宗長は、太刀を持して、その列に連なったと伝えられている。

## 【南条時光】

日興上人が謗法の山となった身延を捨てて、河合の由比家へ下られたのを、自家の持仏堂へお招き申し上げ、さらに自分の領地内の大石が原に大石寺の基である大坊を建立ご寄進申し上げた大檀那である。

時光の父、南条兵衛七郎は、駿河国富士郡上野郷の地頭だったので、上野殿とも呼ばれていた。しかし、文永二年（西紀一二六五年）三月、幼い九人の子供を残して亡くなったのである。

日蓮大聖人は、入信まもない南条時光のために、わざわざ鎌倉から富士へおいでになって、墓参をされ、回向あそばされた。この時、次男の七郎次郎時光はわずかに七歳であった。

時光、十六歳の時、初めて身延の日蓮大聖人のもとへ御供養の品々をささげた。また深いご慈愛のこもったお手紙をいただいたのであった。

文永十二年（西紀一二七五年）正月には、日蓮大聖人のご名代として南条殿の墓参にみえた日興上人と初めて会われた。十六歳の時光殿と三十歳の日興上人の間に、若々しい法談がかわされ、時光の信仰は、いっそう堅いものになったのである。そして、富士周辺に大折伏戦を展開され、南条の一族をはじめ、多くの入信者をみて、駿河方面の信者の中心者と日蓮大聖人より認められていたのである。

日興上人を中心に、時光らの手によって折伏が進むにつれて、三障四魔は競い起こり、弘安二年（西紀一二七九年）九月には富士下方の熱原で、神四郎ら信者二十人が平左衛門尉の手で捕えられるという大法難が起こった。

時光は、信者の中心者として、迫害を受けた僧俗を外護したが、南条家へも幕府の圧力がかかり、不当に重い税金をかけられて、自分が乗るべき馬も、妻子が着る満足な着物も整えられない、苦しい生活を送ったのであった。しかも、その苦しいなかから、日蓮大聖人への御供養は怠らず、純真に信心を貫いたのである。

日蓮大聖人は、「上野賢人殿」という、日蓮大聖人ご一代にただ一度しか用いられない名誉な呼び名をもって、二十二歳の時光の信心をめでられているのである。

また、弘安五年二月、時光が大病にかかったときには、日蓮大聖人より「法華証明抄」をいただいて激励され、みごと全快して、七十四歳の長寿をまっとうしたのである。

文永十一年より弘安五年までの九年間に、時光より日蓮大聖人への御供養は、おびただしい数になっている。

時光へあてられた日蓮大聖人の御書は、現在残っているだけで三十数通あり、そこに記されている御供養の品のおもなものをあげると、

鷲目　清酒　河苔　芋ノ頭　餐　柑子　蒟蒻　牛房　帷巾　塩　油　小白麦　串柿　白米　栗　柿　焼米　筍　酢筒　莚　薯　十字　摺豆腐　柚　飴　提子　大根　香

などで、身延の山中の日蓮大聖人のご生活を考えての、真心のこもったものばかりであり、地頭といっても小さな上野の郷であり、苦しい生活のなかから、この多くの御供養をされたことを思えば、その信心がしのばれるのである。

大石寺建立のときにも、時光はその財産をかたむけて心から御供養をされた。

また、重須（いまの北山）にご隠居所を建てられるときにも、尽力されているのである。

若くして信心に励み、護法のために偉大な功績を立てた南条時光こそ、われわれの信者の鏡である。

後には、左衛門尉に任官されて、十数人の子供たちに囲まれた幸せな家庭を築いて、功徳の姿を示しているのである。

## 【富木常忍】

富木胤継は承久二年（西紀一二二〇年）の生まれで、日蓮大聖人より二歳年上である。下総国（いまの千葉県）の人で、幕府の役人であった。日蓮大聖人の弟子となってからは、同僚の大田乗明、曾谷教信等を折伏し房

総方面の中心となって、たえず日蓮大聖人をはじめ門下一同の外護の任を果たしてきた強信者の一人である。

文応元年（西紀一二六〇年）七月十六日、立正安国論を奉った第一回の国家諫暁後、松葉ケ谷の草庵を焼かれ、所を追われた日蓮大聖人をお助けしたのをはじめとして、伊豆の流罪、小松原の法難、竜の口の法難等においても、たえず日蓮大聖人門下の外護の任にあたられたのである。

人本尊を明かされた「開目抄」が四条金吾に、法本尊を明かされた「観心本尊抄」が富木胤継に与えられたということは、四条、富木の両人が、日蓮大聖人外護の任の双翼たることを如実に示すものである。

富木殿が日蓮大聖人からいただいたお手紙のうち、おもなものは次のとおりである。

富木殿御消息（文永六年・西紀一二六九年）
寺泊御書（文永八年）
佐渡御書（文永九年）
観心本尊抄（文永十年）
法華取要抄（文永十一年）
法華行者逢難事（文永十一年）
富木殿御書（建治元年・西紀一二七五年）
観心本尊得意抄（建治元年）
聖人知三世事（建治元年）
四信五品抄（建治三年）

常忍抄（建治三年）
始聞仏乗義（建治四年）
可延定業書（弘安二年・西紀一二七九年）
四菩薩造立抄（弘安二年）
治病大小権実違目（弘安五年）

このうちの観心本尊抄、法華取要抄、四信五品抄は十大部であり、始聞仏乗義、常忍抄等は宗旨の肝要を述べたお手紙である。このことから、富木殿が房総方面の信者の中心者であるからということのみでなく、教学面においても、力のあった人であることがうかがわれる。

しかし、上行菩薩の再誕である日蓮大聖人を目の前にしながら「上行菩薩はいつ出てくるのですか」と質問したり、大黒をまつったり、釈迦像を造立したりしているところをみると、やはり日蓮大聖人の仏法を真に理解していたとはいえない。

また、富木殿の母親が九十数歳で亡くなり、その遺骨を持って日蓮大聖人のいらっしゃる身延に行った帰りに、お経を忘れてきてしまって、日蓮大聖人から「おまえは日本第一の忘れっぽい人だ」とご注意をいただいた、ユーモラスなお手紙もある。

また、母親に孝行したと同時に、夫人とも円満に暮らしていた様子が、お手紙に拝される。

富木尼御前御返事（九七五ページ）いまときどののこれへ御わたりある事尼ごぜんの御力なり……今ときどのにけさんつかまつれば尼ごぜんをみたてまつるとをぼう。

日蓮大聖人に仕えては、性格の強盛さを反映して、信心も純真であったが、日蓮大聖人滅後、日興上人にお仕えできなかったのは残念なことである。

## 【阿仏房】

阿仏房日得のこと。阿仏御房とか阿仏上人とも呼ばれている。俗姓は京都の遠藤家で為盛といい、法諱は日得、阿仏房と号した。順徳上皇の北面の武士で、承久三年(西紀一二二一年)上皇が佐渡に流されたとき、供をしてきて、佐渡に定住したと伝えられているが、あるいは、それ以前からの土着の人であったともいわれている。

日蓮大聖人の佐渡流罪中に、塚原三昧堂において、大聖人を論詰しようとして、かえって折伏され、それまで深く信じていた念仏を捨てて妻・千日尼と共に大聖人に帰伏した。以来、文永十一年に大聖人が流罪赦免となって鎌倉へ帰られるまで、風雪をいとわず、危険をおかして、櫃を背負って深夜の道を往復して給仕に努めた。

大聖人が身延へ入られてからも、大聖人を慕って、八、九十歳の老体にもかかわらず、三回も御供養を携えて身延へおたずねしている。大聖人はその純真な信心をほめられて、阿仏房上人、阿仏上人等と呼ばれ、またこの信心から出たお目通りが、現在の「お目通り」の儀式となっている。また阿仏房の純真な信心こそは、現在でも総本山に参詣する根本精神となっているのである。

また生命論の立ち場からも、阿仏房御書(一三〇四ページ)には「然れば阿仏房さながら宝塔・宝塔さながら阿

仏房、此れより外の才覚無益なり」と述べられた重要な御書をいただいている。また豊後房、覚乗房、山伏房等を指導し、子息の藤九郎盛綱もその志を継ぎ、曾孫の如寂日満は年少より富士に上って日興上人に仕えて、北陸における仏法の中心者を命ぜられたのも、まったく阿仏房が大聖人の時代に、この方面において大功労があったからである。阿仏房は弘安二年（西紀一二七九年）三月二十一日、年九十一歳の高齢で亡くなった。

## 【日蓮宗一致派】

日蓮大聖人ご入滅後、法華経の本門と迹門に勝劣があるかないかで諍論が起こり、本迹一致を主張した系統が、身延山を総本山とした日蓮宗（単称）である。そのおもな寺と系統は、

| | |
|---|---|
| 身延山久遠寺 | 日向十一世日朝 |
| 池上本門寺 | 日朗 |
| 中山法華経寺（中山妙宗） | 富木日常 |
| 京都妙顕寺 | 日像 |
| 京都本国寺 | 日朗 |

……

| | |
|---|---|
| 不受不施派 | 日奥 |
| 不受不施講門派 | 日講 |

日蓮大聖人の仏法は五重の相対で明らかなごとく、迹門は劣って本門は勝れ、文上は劣って文底が勝れるゆえに、文底下種の南無妙法蓮華経でなければならないことを、この宗派はまったく知らないから、すでに本迹に迷っているのである。

## 身延離山および当時の情勢

身延山には日蓮大聖人が九か年の間お住まいになり、しかも日蓮大聖人は御弟子・日興上人に対して池上相承で「身延山久遠寺の別当たるべきなり」とご付嘱されているが、現在の身延は日蓮大聖人とも日興上人ともぜんぜん関係のない偽物の日蓮宗になっている。こともあろうに蛇やキツネを祭るような怪山と化した理由については、次のような歴史的事実があるのである。

日蓮大聖人は弘安五年に六十一歳でご入滅になるにあたり、御弟子・日興上人に一切を付嘱された。これが身延・池上の二箇の相承である。

よって日興上人はご付嘱どおり身延山において一宗の総貫主、御法主となられたのであった。このとき地頭の波木井実長は「日興上人が身延山においでになったことは日蓮大聖人のご再来と思い、たいへんにうれしくて、世間のことにつけても、出世間のことにつけても、何事も不足はありません」とのお祝いを申し上げている。

しかるに他の五老僧たちは各自の本国に帰ってしぜんに身延を捨てた形となった。それのみか五人は天台沙門と名のって先師たる日蓮大聖人を捨て、上は本尊問題から下は神社参詣等を許す等世間に迎合し、すべてが軟らかになって、先師日蓮大聖人の末法の御本仏としての教風は廃れるにいたった。

三年忌も過ぎて七年忌を迎えるにあたって、日興上人は他の御弟子方に対し、ゆえなく身延を捨てるのはど

うしたことか、早く登山せよと促がされたが、その経緯は美作房御返事に明らかである。

その間に民部日向がただ一人身延山へきたので、日興上人は学頭職につけられた。

それから二、三年に地頭・波木井実長はすっかり日向の軟風にかぶれ、初発心の師たる日興上人を捨てて左記のような四箇の謗法を犯し、日興上人の諫暁もいっこう聞き入れなくなった。

四箇の謗法
- 1、釈迦像を造立して本尊とした
- 2、神社（二所・三島）に参詣
- 3、福士の塔を供養
- 4、念仏の道場を造立

かくて身延山は民部日向と波木井氏がグルになったまったくの謗法の山と化したので、日興上人は重大なるご決意のもとに、日目・日華・日仙等の直弟子方を率いて身延をご離山になり、河合に行かれ、ついで南条氏の請いに応じて上野に移られ、さらに現在の富士大石寺をご建立になり、広宣流布のもといを固められたのである。

一方、身延山においては、波木井氏の親族中にも清純に日興上人についた方もいたが、原殿をはじめしだいに亡くなって、身延と富士との往来も絶えた。身延山にいすわった日向も晩年には房州の藻原に立ちのき、身延はたんなる波木井の檀那寺となり、まったくもぬけのからになった。以来数百年の間、身延山は濁りきった謗法の山として現在にいたっている。江戸時代の中山の日親は原殿御書を引用して、この当時の日向の謗法行為を責めたうえで「身延山でも池上でも下馬してはならない上に、参詣は沙汰の限りなり」といっている。

現在の身延の堂塔は、徳川時代の初め日蓮大聖人のお住まいになった草庵とは反対側の山をけずって建てたもので、徳川の権力と結びついてできた寄せ集めの新興宗教であり日蓮大聖人とは何の関係もない。

また池上やその他の各寺では日朗を開祖とするものが多い。日朗は一度は日興上人に背いたものの、元来が温良な人で後には富士に日興上人を訪ね、手をとって泣いたと伝えられている。よく世間の俗説に日朗を「師孝第一」などと祭りあげているが、これは後世になってから一致派がデッチあげたもので、事実は日興上人こそ「常随給仕、師孝第一」であったことは歴史が雄弁に物語っているのである。

六老僧第五の日頂も五老僧について日興上人に反対したが、晩年には富木氏と絶縁して、富士で入滅している。その他にも日澄とか日順とか身延系の学僧で富士に帰伏した方もたくさんあるのである。

この当時の情勢を思うに、身延の墓番帳に六老僧が主体となって十八人を選定しているが、そのうちで過半数の十人までは日興上人およびそのお弟子、孫弟子にあたる方々となっている。

日興上人へのご相伝についても、誰一人、異議をさしはさむ余地もなかったことが明らかである。富士に対する罵詈雑言は当時の文献にはいっこうそれが見当たらないで、すべて何百年か後の中世のものにすぎないのである。

## 身延の教義と本尊

この宗派の教義は、元来本迹一致を主張し法華経の文上を立ててきた。これは同じ法華経でも迹門と本門と文底の三種類あることを知らないから、末法にはまったく縁のない天台の法華経を生かじりして説いているのである。

日蓮大聖人は治病抄（九九六ページ）に「本迹の相違は水火天地の違目なり」と仰せられている。さらに開目抄

上（一八九ページ）には「一念三千文底秘沈」と仰せられているから、日蓮大聖人出世のご本懐は文底秘沈の三大秘法なのである。

この宗派では法華経文上の妙法を立て、あるいは応身の釈尊を本尊として、脱益の釈迦仏を本仏にして日蓮大聖人を菩薩と呼び僧宝としている。しかるに日蓮大聖人は本尊問答抄（三六五ページ）で「此れは法華経の教主を本尊とす法華経の正意にはあらず」と仰せられ、御義口伝下（七六〇ページ）で「本尊とは法華経の行者の一身の当体なり」と仰せられ、また同じく御義口伝下（七六六ページ）に「末法の仏とは凡夫なり凡夫僧なり」とお説きになっている。

要するに不相伝家の身延派は、日蓮大聖人のご真意を知らず、日蓮大聖人ご入滅後数百年を経た今日においても、釈尊を拝むのか、日蓮大聖人の像を拝むのか、曼荼羅を拝むのかさえも知らない。

したがって、本尊の教義も儀式も定まらないで、いたずらに時流にへつらっているのが、身延の実体なのである。

日本社寺大観によれば、身延には七面山、石割稲荷、日朝堂、願満稲荷、摩利支天堂、帝釈堂、瘡守稲荷、鬼子母神堂等々があり、本尊を店頭で売りに出しているのである。

本尊の雑乱は日蓮正宗以外の各宗派に共通であるが、特に身延山を本山とする日蓮宗（単称）ははなはだしくて、末端の小寺ではまったくとんでもないものを祭って拝ませている。

昭和三十年三月、小樽問答において身延派代表は、本尊雑乱、身延派教義の誤り等を創価学会代表に徹底的に撃滅された。これは天下周知の事実であり、「小樽問答誌」には詳しく身延の謗法大敗ぶりが記載されてい

る。その後、身延は本尊雑乱に対する学会の追及にたえかね、しかも何を本尊とするかいまもって一致せず、苦しまぎれに日蓮宗教学審議会によって「釈迦像を中心に背後に十界曼荼羅、宗祖の像を左横に安置する」という本尊統一暫定案を決めたとは笑止千万のいたりである。また最近は大曼荼羅は日蓮大聖人正意の本尊にあらずと否定し、一尊四士などを本尊とするなどといいだすにいたり、ますます大謗法を重ねているのである。

## 池上と中山

池上本門寺（開山は日朗）・中山法華経寺（開山は富木日常）・京都妙顕寺（開山は日像）等はみな一致派で、明治から大正にかけて、身延山を本山とする日蓮宗（単称）を立てていた。

昔からこれらの寺は、だいたいが身延と同じ系統であったが、時には身延に反対しまた仲良くなったりしてきている。戦時中には統合されて膨脹したが、戦後はまた脱退が多く、中山も身延から脱退して中山妙宗という新宗派を開いている。

これら各寺の開山は日蓮大聖人に深縁の方々であり、日朗は六老僧の一人であり、富木常忍（日常）は観心本尊抄をはじめ多くの御書をいただいた方である。しかるに日蓮大聖人ご入滅後、日興上人がただ一人、正法正義を受け継がれて現在の大石寺に伝承されてきているのに反し、他の弟子達は相伝がなく、また第二祖日興上人に反逆したため、一点の濁りが数百年の間にますます濁乱してしまったのである。

日本社寺大観によれば、池上には清正公堂、長栄稲荷、大黒堂等々、中山には荒行堂、刹堂（鬼子母神堂）などがある。

要するに池上は年一度のお会式を売り物にして寺を経営し、中山は鬼子母神を祭ったり、加持祈禱の気違い

荒行行者を養成する本家のようになってしまったのである。

**京都の一致派**　日朗の弟子・日像は京都に出て布教し、妙顕寺を中心に勢力を張った。日像は帝都弘教の付嘱を受けたと称しているが、当時十幾歳の少年にそんな付嘱があるとは考えられない。その教義は釈迦本仏、本迹一致の邪義であり、京都の一致派は真っ先に堕落し、軟風にそまり、邪宗と妥協して大謗法を犯したのである。現在の身延派の大部分は京都一致派の流れであり、身延山久遠寺、池上本門寺系統は少ないのである。後に京都の一致派から、日蓮宗勝劣派といわれる日隆等の本門法華宗、日真・日陣等の法華宗がケンカ分かれして飛び出している。

**日蓮宗不受不施派、同講門派**　岡山県妙覚寺を本山とする日奥の開いた一派が日蓮宗不受不施派であり、さらに分裂して日講の開いた系統が不受不施講門派である。その教義は身延系統と同じく本迹一致の邪義である。

## 【本門法華宗（旧八品派）および仏立宗等】

観心本尊抄（二四八ページ）に「但八品に限る」と仰せられているところから、日蓮大聖人のご正意は八品（法華経の涌出品から嘱累品にいたる八品）であると立て、八品所顕上行所伝の妙法を法宝とし、脱益の釈尊を仏宝とし、上行日蓮を僧宝と立てるのがこの宗派である。

日蓮大聖人ご入滅直後に、本迹一致の主張もあったが、これと反対に本門張りの硬派もあって天目らはその

ために日興上人に反対して一箇の邪義を立てた。

その後、日蓮大聖人ご入滅百三十年ごろ、京都一致派の妙顕寺の日隆、日存、日道等が本迹勝劣を唱えだして八品正意と立てた。

日隆は初めのころ一致勝劣を議論したときに「本迹一致の門流を捨てたことは後悔千万で今後は一致門流に背かない」旨の詫び状を妙顕寺住職に差し出したほどの憶病軟弱な者であったが、その後、妙蓮寺日忠なども八品派を立てて、だんだんに弘まっていった。八品の流れは尼が崎本興寺・鷲栖鷲山寺・岡宮弘長寺・京都本能寺・京都妙蓮寺等である。

観心本尊抄に「但八品に限る」とあるのは、付嘱流通の段をお示しになったものであって、仏と本尊とは寿量品に限るのである。

ゆえに本尊抄の次下には「寿量の仏」「寿量の本尊」と仰せられて「八品の仏」「八品の本尊」とは仰せられないのである。

新尼御前御返事（九〇五ページ）　今此の御本尊は……宝塔品より事をこりて寿量品に説き顕し神力品・嘱累に事極りて候いしが云云。

しかも八品派は観心本尊抄（二四七ページ）の「此の本門の肝心南無妙法蓮華経の五字に於ては……八品を説いて之を付嘱し給う、其の本尊の為体……」の文を無理に曲解して「之を」とは「八品を」と読んでいる。これはとんでもない誤りで、前後の文脈上、「之を」とは「南無妙法蓮華経の御本尊を」という意であって、決して八品でないのは明白である。八品所顕の本尊とはたいへんな誤りである。

しかも文上脱益の寿量品すら末法には有害無益であって、日蓮大聖人のご正意は寿量文底下種の南無妙法蓮華経であるのである。

御義口伝下（七五三ページ）　然りと雖も而も当品（寿量）は末法の要法に非ざるか其の故は此の品は在世の脱益なり題目の五字計り当今の下種なり、然れば在世は脱益滅後は下種なり仍て下種を以て末法の詮と為す云云。

ゆえに八品正意とはまったく意味のない邪説であって、日蓮大聖人のご正意に反するのである。

また、彼らは寿量脱益、八品下種（または神力下種）などというが、これも本尊抄の文底下種の一品二半を知らない邪義である。

さてこの本門法華宗は現在いくらも信者がなく勢力もない。いまは法華宗（本門流）と名のって戦争中に本妙法華宗（真門流）や法華宗（陣門流）と合同して法華宗を結成したが、最近はまた三つに分派して細々と露命をたもっている。

本門法華宗から大正・昭和にかけて分かれたものに、本門経王宗（東京方面）や本派日蓮宗（茨木市方面）などがあるが、いずれも弱体である。

徳川時代の末に八品派から分かれたものに日扇の開いた本門仏立宗がある。現在は法華宗（本門流）より新興宗教たる仏立宗のほうが大きな勢力をもっている。

勝劣八品派仏立講の開祖は長松清風で、死後、日扇と呼ばれた。文化十四年（西紀一八一七年）四月、京都蛸薬師室町に生まれた。姓は大路、後に長松家を継ぐ。二十九歳の時、浄土宗より日蓮宗に改宗し、三十二歳

の時に出家。しかし、まもなく還俗(げんぞく)して居士(こじ)となった。清風は東山の西行庵に行って島田弥三郎と協力し、日耀のもと八品講の改革に乗り出した。当時、八品隆門は久遠派と皆成派に分かれて、互いに自派の論を正当化する論議がやかましかった。清風は「御法のしるべ」を著わし、高松講の頼該(らいがい)に贈り、協力して皆成派に反対した。安政四年一月十二日、京都八品堂の谷川浅七宅において華洛八品を興し、仏立講と称して高松八品講より分離独立した。文久二年（西紀一八六二年）大津に法華堂を建てた（後に長松山仏立寺と号す）。こうした清風の活動は、他寺の目の上のこぶとなり、本応寺や大津六十四か寺から新義異流としてにらまれ直訴された。明治元年（西紀一八六八年）七月「清風は切支丹の法を使った」という罪名のもと、入獄した。こうして仏立講は弾圧されたのである。清風は、三途不成の新義を立てないこと、勝手に本尊を書写しないこと、山命師命に背かないこと等の誓約を本応寺に入れ、さらに日熹の弟子になることを条件として釈放された。しかし清風は釈放されると、また新派独立に奔走(ほんそう)しはじめた。頼該門下の太田日信が、華洛仏立講と協力して備後に仏立講の一派を興したために、再び皆成派と久遠派が争いはじめ両山対蓮山の不和となった。清風は時期到来と思い、明治十一年（西紀一八七八年）門下の御牧現喜と共に妙蓮寺日耀を扶(たす)けて、妙蓮寺の別派独立をはかったのである。しかし明治十五年（西紀一八八二年）八月に寺院側で五山和融が成立した。加えて、妙蓮寺、そして太田日信は両山に妥協、ここで清風の妙蓮寺別派独立は断念せざるを得なくなった。清風は常に別派独立に専念してきたが、この風潮は自らの首をしめる結果となり、自らの仏立講内部にも別派独立が盛んとなった。このため清風自身も、一時身を引き、明治二十三年（西紀一八九〇年）二月、大津において、講内の改革をはからんとしたが、七月十一日、大阪玉江組の招きで赴(おもむ)く途中、急病で没したと伝えられる。時に七十四歳であっ

た。日扇の死相は非業なものであったため、当時の幹部は疑いをもち、仏立講から脱退し、日蓮正宗信徒に折伏をされて改宗し、仏立講は壊滅同様となった。しかし、そのほとぼりのさめた頃に、影響の少ない関東に進出し、京都の宥清寺を本山とし、東京・渋谷の乗泉寺を中心として活動を始めた。

大正二年に仏立講の亀井日慧と乗泉寺の田中清歓の二人が大石寺第五十六世日応上人に法論をいどんだが、徹底的に破折されている(大石寺の自然鳴誌に掲載されている)。昭和にはいり、戦後二十一年ごろから仏立宗と名のるようになったが、日蓮正宗の折伏により徹底的に破折され、衰微の一途をたどっている。そして仏立宗は分裂して在家日蓮宗浄風会(東京方面)、日蓮主義仏立講(名古屋方面)、法華宗獅子吼会(東京方面)等となった。こうしてみると、徳川末期より明治初期にかけては宗教活動は僧侶中心の活動から信徒中心の活動に移った過渡期ということがいえる。この流れは明治、大正、昭和にかけて顕著となり、宗教が広く民衆の手に帰していったことになる。しかしこれが、多くの新興宗教や邪宗教の横行する結果ともなったのは、ひとえに民衆が宗教に無知であり、宗教理念のなんたるかも知らず、宗教批判の原理を知らないためであり、そのために、宗教によって救われるどころか、逆に宗教によって不幸のドン底に落ちていったのである。

## 【顕本法華宗】

妙満寺派または什門派とも称し、本山は京都の妙満寺で、日蓮大聖人滅後百年のころ、日什が派祖となって開いたものである。

日什はもと比叡山における天台の学者であったが、晩年に日蓮大聖人の御書を拝読して、末法の法華経は日蓮大聖人によらなければならないことを悟り、さて日蓮門下は多くの宗派に分かれてどの宗派が正統であるかがわからず、六老僧もすでに入滅の後であったので尋ねる術もなく、やむなく自ら御書を読んで御書によって悟ったと称し、経巻相承を立てた。

日蓮大聖人も一応は法華経によってわが身が上行菩薩の再誕なりとお立てになったのであるが、法華経には上行菩薩の付嘱が明確に予言されており、日蓮大聖人はまったくその予言どおりのお振舞いの後に、三大秘法抄（一〇二三ページ）に「此の三大秘法は二千余年の当初・地涌千界の上首として日蓮慥かに教主大覚世尊より口決相承せしなり」と仰せられている。ゆえに仏教の真髄は血脈相承・師子相承といって、必ず面授口決のご相伝によらなければならない。たとえ年代が離れていても、経文の証拠によって決定されるのである。

しかるに日什の場合には予言の経証もなく、面授口決ももちろんないままに、経巻相承と立てて自己の正統を主張するのは、仏法を破壊する根本原因となるのである。

日蓮宗ならどんな宗派でも、御書と法華経を手にするのは当然であるが、それでいて多数の邪義を生ずる理由は、こういうところにあるのである。

さてこの宗派では本迹の勝劣を立て、本門の一品二半でなければならないと説くのであるが、法宝には寿量文上・本果の妙法、仏宝には寿量顕本・脱益釈迦、僧宝を上行日蓮と立てることは、やはり天台の文上の一品二半（法華経涌出品の後半、如来寿量品、分別功徳品前半）に執着しており、これは日蓮大聖人のご正意ではない。

法華取要抄（三三四ページ）にお示しのように、一品二半には二意があって、在世の衆生を得脱せしめる一品二

半と、末法下種の衆生のために説きおかれた一品二半とは、その相違が天地雲泥である。それは観心本尊抄においても「又本門十四品の一経に序正流通あり」と仰せられる辺の一品二半と、さらに「又本門に於て序正流通あり」と仰せられる辺の一品二半がある。前者は五重の三段のなかでも第四本門脱益の三段における在世脱益の一品二半であり、後者は第五文底下種三段の法門における正宗分の一品二半であって、両者を混淆することは、まったく日蓮大聖人のご正意に反するのである。

これらの邪義をもととした顕本法華宗において、明治のころ本多日生が出て雑乱撤廃、本尊統一を叫んだが、いかなる本尊に帰一するかが問題なのである。本多日生は戒壇の大御本尊に怨嫉し、極端な釈迦本仏義を唱えたのである。しかも戦争中は本迹一致で本尊雑乱の本家である身延派と合同したのであるから、まったくデタラメということができよう。最近その一部分は身延から分離して顕本法華宗を名のっているようであるが、大部分は今なお身延派に属して雑乱謗法物と同居しているありさまで、旧来の顕本法華宗になお輪をかけた大謗法を犯しているのである。

## 【法華宗】

そのほか本迹勝劣を立てる法華宗に法華宗本成寺派（陣門流）と本妙法華宗本隆寺流（真門流）があり、いまはそれぞれ法華宗（陣門流）、法華宗（真門流）と称している。戦争中はこの二派と本門法華宗が合同して法華宗と称したが、戦後はまたそれぞれに分かれた。

法華宗（陣門流）は現在、越後・三条市の本成寺を本山として、日朗の弟子・日印が派祖である。本京都の本国寺と共に日印の教勢下にあったが、日印の弟子・日静は京都本国寺を日伝に、越後本成寺を付して世を去った。その後、日陣は本迹勝劣を唱え、日伝と論争の結果、日陣の本成寺は日伝の本国寺一致派）と絶縁し分立するにいたった。

法華宗（真門流）は日朗・日像の流れをくむ京都妙顕寺（本迹一致派）日具の弟子・日真が、四条大隆寺を開き本迹勝劣を唱えたことに始まる。

これらの宗派はいずれも本迹勝劣を立て、本門寿量品を正意と立てている。本門寿量品を正意と立てるものの、法華経文上教相に執着し、仏宝を脱益の釈尊、法宝を妙法蓮華経、僧宝を上行日蓮と立てていこれは日蓮大聖人の正意とは遠くかけ離れた誤れる邪義である。

すなわち、その一端を示すならば、天台大師の立てた三種の教相いわゆる第一根性の融不融、第二化導終不始終、第三師弟の遠近不遠近、このなかの第三の教相をもって、日蓮大聖人が常忍抄（九八一ページ）法華経と爾前と引き向えて勝劣・浅深を判ずるに当分・跨節の事に三つの様有り日蓮が法門は第三の法門と仰せられている辺の第三法門と同様であると解しているのである。まったくはなはだしい僻見であ

日蓮大聖人の第三法門とは、第一に権実相対、第二に本迹相対、第三に種脱相対して建立した文底下本門のことである。これを天台の三種の教相に相対すれば、天台の第一第二は日蓮大聖人の第一に属し、天の第三は日蓮大聖人の第二に属するのである。そして、さらに種脱相対一種を加えて第三となし、「我が内の寿量品」と仰せられて文底下種の寿量品は事の三大秘法であり、これこそ日蓮の第三法門であると仰せい

るのである。

同じく文上の寿量品にしても、体内・体外の別があって、その相違は天地の開きがある。ゆえにこれらの宗派で執着する文上体外の天台の寿量品では、日蓮大聖人のご本懐とは百千万億倍も劣っているのであり、まったく不相伝のゆえに陥った謬義なのである。

また彼らは偽書日朗譲状をもって日蓮大聖人の直系と主張した時代もあったが、現在は日朗譲状を彼らも偽書と認めており、もはや論ずるにたらない。

他の日蓮宗の例にもれず本尊の雑乱はにぎやかで、本成寺境内には六角堂・番神社・弁財天神・鬼子母神・稲荷神社・諏訪神社等の謗法物を飾って拝ませている。現在いずれも檀家は不幸であり、寺はすたれて昔の姿はぜんぜん見られず壊滅を待つばかりである。

## 【旧本門宗】

第二祖日興上人、第三祖日目上人のお弟子で、富士大石寺から分立した各派が旧本門宗である。現在は日蓮正宗に帰一しているものが多いが、なかにはいまなお身延派に合同しているものもある。

いわゆる富士門流の八本山とは、年代順でいえば、①富士大石寺を中心として　②北山（重須）本門寺　③京都要法寺　④伊豆実成寺　⑤下条妙蓮寺　⑥小泉久遠寺　⑦保田妙本寺　⑧西山本門寺である。

富士北山本門寺は日興上人が富士大石寺建立後に移られた地であり、日代が第二世となった。開基檀那は石

川孫三郎殿である。

日代が間もなく北山を擯出されて移ったのが西山本門寺である。日目上人が七十四歳のご老体で天奏のため京都へ上られる途中、美濃の垂井でご遷化されたので、お供をしていた日尊がそのまま京都へ行って開いたのが要法寺である。伊豆の実成寺も開山は日尊である。また同じく日目上人のお供をしていた日郷は一度富士大石寺に帰ったが、後に擯出されて房州の保田へ移り、そこで建てたのが妙本寺である。小泉久遠寺は同じく日郷が仮住庵したもので実の開山は日安である。また富士下条妙蓮寺は日興上人の弟子である寂日坊日華上人の開かれたもので、南条時光殿の邸の跡に建てられた。

これらの各寺は、正統相伝家たる富士大石寺に対し、帰一した時代も反逆した時代もあった。明治時代には富士大石寺に帰一し、日蓮宗興門派と称していた。しかし各寺は長年にわたり日蓮大聖人の正義に反することが多かった。

まもなく富士大石寺は謗法の各寺を切りすて、日蓮正宗と称し現在にいたっている。そして他の七本山は邪義を改めぬまま本門宗と称していた。

この旧本門宗は太平洋戦争中に、身延門流に合同してしまった。しかし富士下条妙蓮寺は戦後いち早く日蓮正宗に帰った。

また讃岐本門寺は日華・日仙上人が開かれたのに徳川幕府の宗教行政で北山本門寺の末寺となっていた。そのため敬慎房日精上人は富士大石寺の正義をかざして折伏に励み、領主の迫害で大御本尊に身を捧げられたが、戦後は待望の日蓮正宗帰一をみた。

最近では保田妙本寺および日郷の弟子・日叡の開山になる定善寺等の日向七か寺が、邪宗身延を脱して富士大石寺に帰一する英断に出た。

京都要法寺は真っ先に堕落し、日辰以来、法華経一部読誦・釈迦像造立などの謬義を立てたが、富士大石寺日寛上人の教風によって、宗祖本仏義を主張し本尊雑乱を排して正義に目覚めた時代もあった。しかるに戦争中は率先して身延派に合同した。

最近では大部分が脱退独立して日蓮本宗と称している。西山本門寺も最近は身延と手を切って単立寺院となっている。

## 【立正佼成会】

「年中下痢をするのは親不幸のザンゲなのですよ、おかあさんを恨んでいるでしょう。その恨んでいる心をザンゲさせて頂ければ人並みの体になれるんですよ」

立正佼成会では〝結んでもらう〟といって、何か悩みがあると幹部にその因縁を説いてもらう。まったくナンセンスなこじつけであるが、結んでもらったらそのとおり実行すれば必ず幸せになれる、実行しなければ〝お悟り(罰)〟があると教えている。〝あなたは色情の因縁が強い〟〝先祖を成仏させていないから、あなたは幸福になれない〟といった類の文句は常に使われている。先祖崇拝と法華経と因縁話を巧みに結びつけて作り上げたのが、立正佼成会の教えなのである。

**その成立**＝立正佼成会会長庭野鹿蔵（日敬）は新潟の生まれで、十九歳で上京し石原炭店の小僧として働くかたわら、主人について六曜七神や姓名判断を習った。その後独立して漬け物屋や牛乳店をしながら昭和十年ごろ霊友会に入会。その後、天理教信者だった長沼マサ（妙佼）をみちびいた。こうして二人はかなり熱心な霊友会信者になった。ところが当時盛んだった霊友会が内部紛争から崩壊し、妙智会、孝道教団、思親会と分裂を始めた。昭和十三年、庭野・長沼の一派も「大日本立正交成会」として、分派した。

その後の佼成会は霊友会とほとんど大差ない教義を立て、目新しいといえば姓名判断を取り入れた点だけだった。ところが終戦後の混乱に乗じて著しく発展、杉並の和田本町に次々とピンク色の道場を建て、悩みの多い無批判な中年婦人層を相手に蔓延し、今日にいたっている。

**作られた教義**＝邪宗教はたえず教義を他から盗んでくる。佼成会もその例にもれない。

一、まず題目を唱えさせる。世間では南無妙法蓮華経だから日蓮大聖人の仏法に関係あるのだろうぐらいに考えているが、題目だけを看板に盗み取って、中身は全く何の関係もない邪義で固めた誤った宗教である。

二、入会すると、霊友会と同じく先祖の〝総戒名〟を祭らせる。「先祖の戒名を本尊にせよ」などとは釈尊の一切経にも日蓮大聖人の教えにもぜんぜんない。日本人の先祖崇拝の美風を利用し、勝手に題目と結びつけて作った邪義である。

三、総戒名で始まった佼成会信仰は〝おみちびき〟と〝本部通い〟で明け暮れる。やがて強信者と認められると〝曼荼羅〟が渡される。この〝曼荼羅〟には弘安四年四月五日の日付けがはいっているが、日蓮大聖人とは何の関係もないもので、形よく似せて、勝手に書いたニセ本尊である。さらにその上になると〝守護神〟と

いうのが下付される。中には神札みたいなものが入れてあるが、これらはいずれも魔神の働きをするものばかりである。また入神といって神がかりになり、発音（狐つきと同じ）や、九字を切ったりして完全に魔性を発揮するようになる。

四、佼成会の本尊は、設立当時からクルクル変わってきた。「本尊に迷えば色心に迷う」との御金言のとおり、迷って迷いぬいて、衆生を迷わせてきたものというべきである。

昭和十三年の教団設立当時は、毘沙門天を本尊としていた。外道本尊時代というべきである。昭和十七年に、中野の現在地に移転したさいに、これを大日如来にスリかえた。副会長の妙佼に神示があったからだという。真言同様だから亡国本尊時代とでもいうべきか。

このころには「南無妙法蓮華経　異体同心天壌無窮　日敬」と書いたものを本尊として使用していたが、これは戦時下情勢におもねたものらしく、敗戦で天壌無窮がつごう悪くなるや、このほうはいつのまにか支部旗に格下げしてしまった。もともと、三大秘法は、仏法の三学、戒・定・慧の本体である。くるくる変わったり、支部旗に格下げとなる「定」が仏法にあるものであろうか、初学の者さえこれを知るはずである。日敬をはじめ、佼成会の幹部は、仏法の初学にも達しない外道の者であることが、これでもわかるであろう。

さて、終戦になると、大日のおかしいことに気づいたとみえ、大日を廃して釈迦と取り替えた。この時も、例の妙佼の神がかりによる指示だったことを、彼らは告白している。

ところが、またまた本尊すりかえが行なわれ「偶像主義による呪術的宗教を排して、特定の本尊や偶像によるべきでなく、曼陀羅中心主義によるべきで……」と、説明を加えたが、なんと、三十三年になると、このマ

ンダラ本尊をひっこめて、再び釈迦像に戻ることになった。それが最初に述べた、現在の一尊四士造立本尊というものである。

「本会におきましては、すでに十四年間、あえて真実の御本尊様の発表を差し控えてまいりましたが……」というのが日敬の弁解であったが、今度は絶対だから変えぬといっているものの、またいつなんどき変わるか、わかったものではない。

さて、四諦、十二因縁、六波羅蜜であるが、釈尊が最初の阿含でも、中間でも、最後の法華経の時にも説いていたようにいっている。だいたい、四諦、十二因縁の法は、二乗を求める者のために説いた法、六波羅蜜は菩薩乗を求める者のために説いた法であり、それゆえにこそ、法華経一仏乗を説くにあたって「四十余年には未だ真実を顕わさず、是の故に衆生の得道差別して、疾く無上菩提を成ずることを得ず」と排したのである。

法華経に「諸の菩薩の中に於て正直に方便を捨てて但無上道を説く」「但楽って大乗経典を受持して余経の一偈をも受けざれ」と。「余経の一偈をも受けざれ」とあるが、日敬になると「方便という語は真実への導入であり、われわれ凡夫としては、どうしてもこの入口を潜らなければ真実へ至れないもの、またそれが結局は、最も近道になるわけでありますから、佼成会の教えの中には多分に方便の要素を含んでおります点も、そのような意味におきまして……」ということになる。彼は、法華経のなかに出てくる十二因縁とか、四諦とか、六波羅蜜という単語が、否定のためにいわれていることに気がつかず、法華経のなかでもこれらを説いていると思っている。

また、十二因縁、四諦そのものの解釈が珍妙をきわめている。だいたい十二因縁は、一個の生命が十二因縁

の間を循環(じゅんかん)していく姿、それによって六道を輪廻(りんね)する原理として説いた一種の「三世の生命論」である。

それが日敬の手にかかると、無明と行とは両親、親（過去の）、祖父母。識、名色、六入、触、受、取は、子、自分、父母（いずれも現在の）、有、生、老は孫、子、自己（未来の）という。珍妙きわまる「三代の生命観」となる。三世の生命論と三代の生命論、世と代との一字違いかもしれないが、それが即、仏と魔との違いである。

六波羅蜜の説明で、日敬は「布施(ふせ)が六波羅蜜の菩薩行のなかで一番大切であり、これには財施（金銭の布施）云云」と説いている。

いったいどの経文に、六度の中で布施行が一番大切だなどと説いているというのか。また、布施波羅蜜をタネに、佼成会が信者に「布施」を強制してよいという理由はどこにもない。これを禁じて、ただ唱題の一行だけを教えられた大聖人の教えを破り、釈迦の経文にも反して、布施が一番大切だなどと憶面(おくめん)もなく無知な会員に教える日敬は、まさに食法餓鬼(じきほうがき)そのものである。

佼成会が建て物で人目を奪う一方で、使う手が姓名判断で、これも有名なものである。字画で吉凶(きっきょう)を占い、六曜、九星、方位何でもござれで、この点からすればまさに「民間迷信総合大学」というところである。佼成会では「法華経を所依の経典とする本会が、姓名鑑定、六曜九星を用いることは、けっして悪いことではなく、むしろ法華経の本旨に基づいた正説であります」と、懸命にP・Rしているが、本部でこうしてあと味の悪い予言をいただいて、ついに、それをのがれたいばかりに入会させられてしまった会員こそ、気の毒である。

本部の法座で行なわれる因縁とオサトリ（罰論）も有名である。要はなんでもザンゲして、ザンゲのしるしは布施に現わせというのである。天理教の行き方をそっくりもってきたものである。だいたい、教団のもとは霊友会からもってき、金の集め方は天理教バリで、そして組織から布教方法、更に新聞、出版物等々にいたるまで学会のマネをしているのが、その実態である。

## 【孝道教団】

天台宗でもない、邪宗日蓮宗ともいえない奇妙な「熟益正法」なる珍説をふりまわす新興邪宗教が孝道教団である。

孝道教団の教祖を岡野正道という。彼はもと天台宗の坊主であったが、昭和の初め横浜で小さなラジオ屋を開いていたところ妻キミ子と共に霊友会にはいった。熱心に「おみちびき」をやり支部長になった。

しかし彼は、霊友会の幼稚な教えにあきたらず、別に新しい一派を開いたのが孝道教団である。終戦後、横浜六角橋に本部を設け、さらに現在の鳥越山を買収して孝道山と称した。

統理に岡野正道、副統理には岡野キミ子がなっていて支部の組織がある。入信すると総戒名を書いた仮本尊を与え、多くの「おみちびき」をすると、マンダラや守護尊神なるものを売るところは霊友会などと同じである。

彼らの唯一の教義である「熟益正法」なるものは、オトギ話同様で、現在の日本人の宗教的無知を証明する

ものである。

その唯一の教義というのは次のようなものである。

「現在は釈尊滅後二千五百余年である。釈尊滅後二千年から二千五百年までの末法五百年は、南無妙法蓮華経の題目だけを唱える上行所伝の下種益の法華経が弘まった。しかし二千五百年以後は熟益の時代で、無辺行所伝の法華経、すなわち熟益正法、みのる法華経でなければ功徳はない」というのである。

このような一時の思いつきは、少しでも仏教を知るものなら誰でも破折できるであろう。なるほど法華経といっても、在世の法華経、像法時代の法華経、末法の法華経と三種がある。種熟脱という法門も法華経のみに説かれている。

しかし法華経囑累品の予言のように迹門熟益の法華経は薬王菩薩の再誕たる天台・伝教によって余すところなく弘通された。しかし末法の現在において迹門熟益の天台宗の教えでは、ぜんぜん功徳がないどころか逆に不幸になるのである。

現在は末法の御本仏日蓮大聖人が一往外用の姿で法華経神力品の予言のように、上行菩薩の再誕として三大秘法の南無妙法蓮華経を弘められ、無辺行、安立行、浄行等をはじめとする地涌の菩薩が広宣流布に励むのである。

日蓮大聖人が報恩抄（三二九ページ）に「日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華経は万年の外・未来までもながるべし」と仰せのように、末法五百年はおろか、末法万年尽未来際までも、三大秘法の大御本尊の功徳は輝くのである。

そのほかに、法華経のどこにも「無辺行」が出現して熟益正法を弘めるなどということは説かれていない。法華経のどこにもないことを勝手な我見でいうのは仏法を壊乱する大仏敵である。日蓮大聖人の下種益とは、下種益、熟益、脱益を一度に生ずる即身成仏の大功徳をいうのである。歴劫修行の熟益は常識で考えても仏が弘めるはずがないではないか。しかも岡野正道が無辺行菩薩の再誕だなどといいだすにいたっては、もってのほかである。

御本仏日蓮大聖人の仏法に反逆し、釈迦仏法まで冒瀆する孝道教団の姿は、仏法の法理に照らしても、無間地獄は疑いのないものである。

## 【砂村問答】

江戸時代の末期、文化文政年間に、江戸目黒の住人で永瀬清十郎という熱心な日蓮正宗の信者がいた。清十郎の折伏は果敢をきわめ、後、尾張法難で戦った人たちは、この清十郎の折伏によるものであったといわれている。

そのころ、江戸砂村（現在の江東区砂町付近）に篠原常八という一致派の信者がいた。常八は、佐渡に日蓮大聖人の難所をたずね、帰途、会津若松で一致派の教義を弘めていた。しかし、そこへたまたまきていた永瀬清十郎の徹底的な破折にあい、屈伏して「これ以後は一致の邪宗を捨て、富士門流の信者となり、帰国のうえ、正法を弘通します」といって江戸に帰った。

江戸に帰った常八は、再び清十郎に会って法門を聞き、ますます強盛な信心に励むようになり、一致門流を折伏して歩いた。一致派の連中はくやしがって、なんとか常八を食い止めようと、成瀬玄益という学者と問答をさせることにした。

問答の当日は、双方から六、七百名の聴衆が集まって行なわれた。しかし、清十郎のすきのない追及の前に、玄益は前々の大言壮語はどこへやら、問答の初めから、ろくろく返答らしい返答もできずに引きさがってしまったのである。

この結果は、江戸中にしだいに広まったので、砂村周辺の一致派の連中は、汚名をばん回すべく、梶柔之助をかつぎだした。一致派は、清十郎の留守に、常八と問答して、打ち負かそうとしていたのであったが、問答の当日、ひょっこり清十郎が現われ、一同は大いに喜び勇んで当日の問答に臨んだ。柔之助の方は、清十郎の姿を見て驚いた。

梶は常八の敵ではなく「傍には迹門、正には本門」とつぶさに一致の邪義を攻められ、清十郎にとどめをさされ、記録には「梶赤面し閉口した」と、しるされている。

一致派と富士門の勝劣は、実にはっきりしたものであったが、席中も家の外もののしりあい、一致方の聴衆がたまりかねて土のかたまりを清十郎に投げつけた。

この卑劣な行為が一致派の者だ、やれ念仏宗の者だと責任のなすり合いになり、他宗と一致派が、くんずほぐれつの同士打ちの大騒動となった。富士門の人々は、さわぎのなかを悠々と引き揚げたのである。この二つの問答を、砂村問答という。

## 【霑志問答】

霑志問答の発端は、明治十一年（西紀一八七八年）十二月、北山本門寺住職玉野日志が、時の大石寺第五十五世下山日布上人に対して、書面で疑難を寄せてきたことに始まる。

玉野日志は、大石寺の繁栄に反して、衰微する一方の北山本門寺を復興するために、京都の要法寺から迎えられた人物であり、そのために大石寺に対して、何らかの手を打つ必要に迫られていた。

そこで、大石寺四十八世日量上人の書かれた「富士大石寺明細誌」（俗に宝冊と呼ばれていた）を取り上げて、その内容について五十項目の疑難をあげて返答を求めてきた。

これに対して日布上人はただちに返書を送り、日志の理由のないいいがかりを論破して、戒壇の大御本尊に対する信心なき悪口は、大謗法堕獄の原因であると断言された。この日布上人の返状に続いて、当時の御隠尊猊下として本山におられた日霑上人（五十二世）がさらに、日志の提出した難問について、一つ一つを取り上げて破折した。ここに日霑上人と玉野日志との問答が始まり、数度の往復があった。そこから、後にこの問答を霑志問答と呼ぶようになった。

富士宗学要集には、

日志の第一問　明治十一年十二月

霑師の第一答　明治十二年一月

霑師の第二答　明治十二年月日不明
霑師の第三答　明治十二年二月七日
日志の第二問　明治十二年三月十五日
日志の第三問　明治十二年五月十五日

の六通が収められているが、この外にも、なお数回の往復があったものとみられる。

日志の議論は大石寺の伝説を集めた宝冊に対して、アラ捜しの邪難をかまえたもので、日霑上人からかんで含めるように破折され、しだいに返答に困って閉口し、かえって自山の謗法を証明する形になった。

諸々の創価学会批判（身延派日蓮宗の「創価学会批判」、仏立宗田中日広の「創価学会折伏早わかり十二問答集」、顕本法華宗窪田哲城の「日蓮聖人の本懐」、身延派安永弁哲の「板本尊偽作論」、本化妙宗連盟高橋智遍の「創価学会が真実なら」など）は、すべてがこの玉野日志の邪義の受け売りであり、すでに日霑上人によってすべて破折しつくされたものである。

問答開始後わずか四年、明治十五年七月、日志は五十歳で死んだ。

## 【小樽問答】

昭和三十年三月、学会の大進出による檀家の減少にたまりかねた身延派では、学会員の少なかった北海道小樽で、法論対決を迫ってきた。

学会では、戸田前会長自ら小樽へ飛ばれての陣頭指揮のもと、池田現会長の司会によって、辻武寿、小平芳平の両教授が代表として立ち、身延側の長谷川義一、室住一妙の両僧正と対決することになった。

昭和三十年三月十一日、雪の小樽市公会堂で千余の聴衆を前にして世紀の法論が戦わされたのである。

司会者の挨拶に始まり、十二分間ずつの講演ならびに五分間ずつの補足講演、さらに一般からの質疑応答があり、最後に四講師の対決で終わったのであるが、身延派は、終始学会側に圧倒されたのである。

こうして、創価学会対身延派の法論対決は、学会の大勝利のうちに幕を閉じ、身延滅亡への一大痛撃となったのである。